鎮西八郎為朝外傳

椿說弓張月 前編 卷上

91356
Ta624t
t

089492-001-6

913.56-Ta624tt

椿說弓張月（鎮西八郎為朝外伝）

滝沢　馬琴／編

M16

DBM-1254

曲亭馬琴編次

鎮西八郎為朝外傳

椿說弓張月

東京稗史出版社藏版

25.8.10

210053

阿部家藏書

為朝外傳弓張月題詞

鎗刀劍戟三千隊。鐵馬金戈一萬重。斬將入堅人莫敵。應教冠者顯英雄。

射柳穿楊藝術奇。保元敵將竟難支。馳兵入陣山川暗。斬冠歸營日色低。

錦袍金甲黃驃馬。玉帶銀盔素線絲。番弓雕弓頻掉箭。手中鑽鐵利鋒刀。

椿説弓張月前編

第一編　全部

東京伊之助藏版

日出扶桑二丈高。金蘭何處匿生逃。男
兒未遂平生志。磨損腰間帶血刀。
愁多不忍醉時別。想極還尋靜處行。誰
遣同衾又分手。不知行路本無情。
一語相歡利斷金。配軍到今識君心。八
郎廟食東海嶼。猶羨當年德澤深。
血戰當年報主忠。斬堅入陣幾千重。英
雄功績何處在。回首沈陰孤島中。
衝突艅艎勢若潮。一時軍卒盡漂流。可
憐烈女島中骨。猶帶冤聲訴怒濤。
孤島猶存戰血紅。當年豪傑總成空。客
船于此重嗟問。悵恨西風夕照中。
仰首乾坤一笑頻。相逢夢裡指行津。鷹
鳴雲霽幽魂散。山驛依然物色新。

驍勇為公武略奇鎮西士卒望旌旗不勞長箭英雄服千載功勳播遠夷殺氣南來戰胆寒沉雲再〻蔽空山英雄預定驅戎策談笑斯須破敵關琉軍戰慄和軍營滿谷連山遍哭聲兵刃相迎一夜殺卒明流血浸空城單騎南來一千里將軍端的建功謨虬人無阻相迎處簞食壺漿滿道途士卒長驅帶羽鵰為公向處將夫驍洲民仰帝如湯禹一統球陽閑本朝皆文化乙丑年冬十一月飯台曲亭主人書於著作堂

明治十六年紀元節應東京稗史出版社雅屬

月痴迂生書

鎮西八郎爲朝外傳椿說弓張月前編目錄

第一回　信西博覽好韓非　爲朝稟性達躾法

第二回　迷路止狼戰　伴家勸猴酒

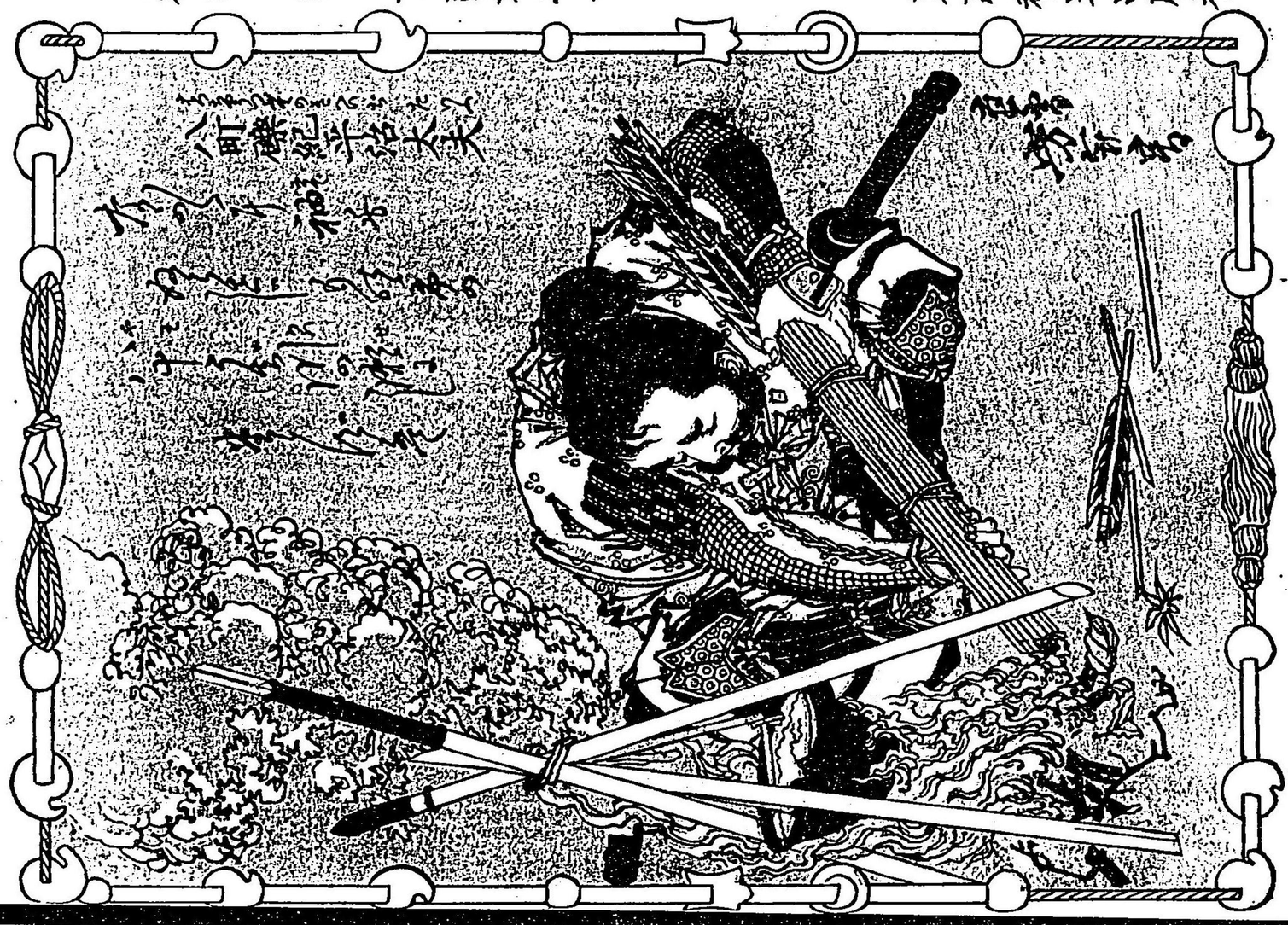
第三回　山雄喪首救主　重季死軀全珠

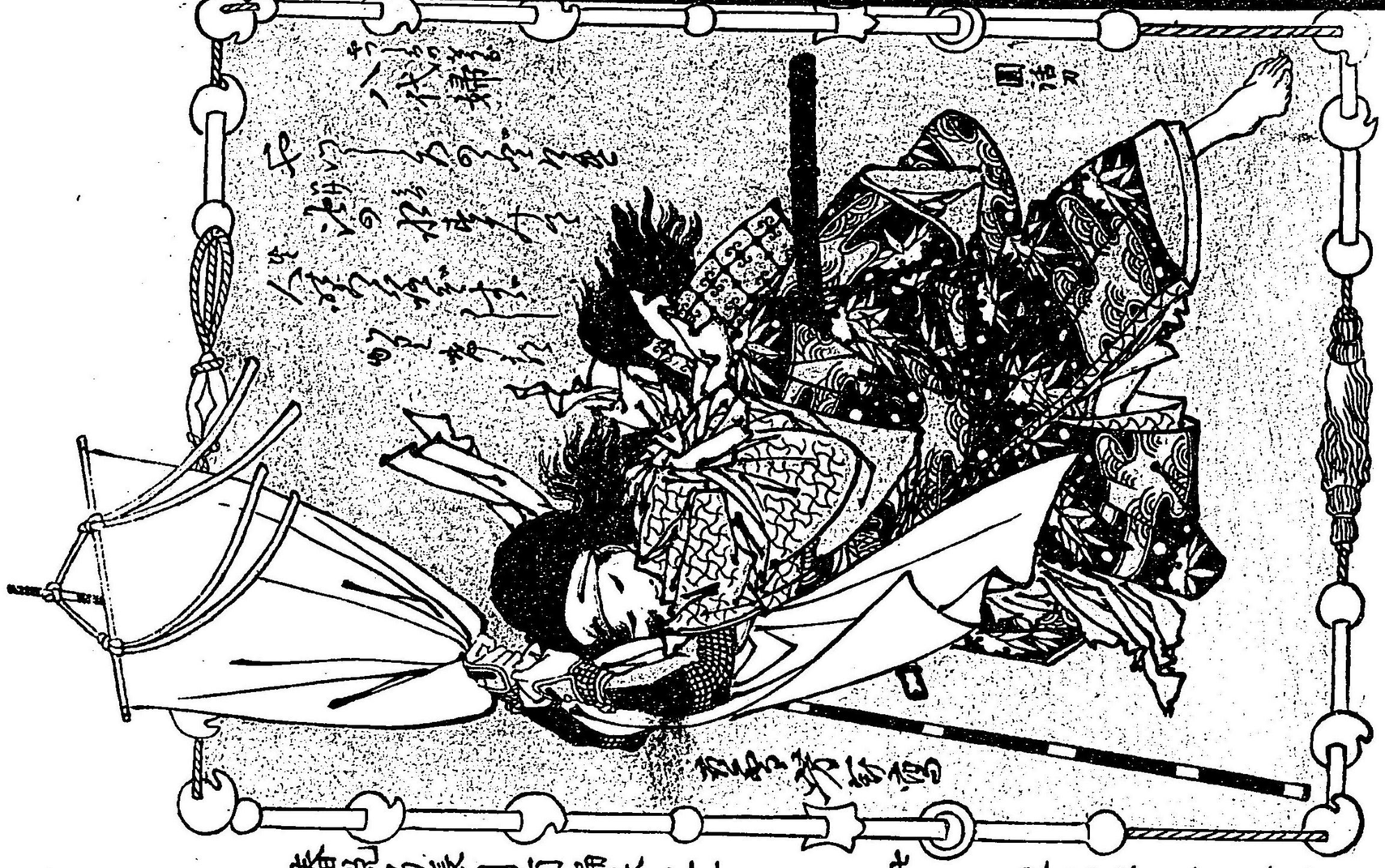
第四回　老猴登塔辱主　病鶴出笯荅恩

第五回　白縫風流操女兵　爲朝勇敢伏九州

第六回
紀平治獻計説地理　寧王女饋芋告寃苦
第七回
紀平治逐船飛鐵丸　野加世駿馬嚼桿棒
第八回
寶荘嚴院御曹子示强弓　白河山中八町礫悲別離
第九回
野風陣没開活路　八代殿戰當飛矢
第十回
為朝單騎走江州　藤市認馬到北濱
第十一回
楊梅瀑布御曹子殺山猿　石山温泉武藤太賣舊主
第十二回
琴弾神社武藤太逢美　觀音寺村白縫女殺仇
第十三回
為朝被配伊豆大島　白縫大鬧千貫旅館
第十四回
簾江饋粮憐配軍　為朝領島聽酷吏
第十五回
白縫汲潮志渡　新院攀生魔界
通計一十五回
前編六冊目録畢　後編六冊嗣出

東京稗史出版社





東京輝東出版社

東京博史出版社

東京博史出版社

この書保元の猛將八郎為朝の事蹟を述べその談唐山の演義小說に倣ひ多くを憑空結構の筆を成閲者理外の幻境に遊ぶがごとく可なり。

為朝琉球へ渡りゐたりと云へ說原何の事を出ることを考へざれども神社考に云為朝八丈島より鬼界に往孫球に至る。今に至り諸島祠を建て島神となすと云へ寺島の和漢三才圖會に又云為朝大島を遁出て琉球國に到る。魑魅を驅て百姓を安ずす。洲民その德を感ずる主となせり。為朝逝去のち球人祠を立て神歸して舜天大神宮と云へり。愚按ずるに保元物語に為朝島に于自殺の事を載せて琉球へ渡るの說なし。彼說を左のごとし。何に據てを詳ならず。今軍記の異說古老の傳話を合せ考且狂言綺語をもそれを綴る。事をその時代を攷るとい山林の口氣を脫ずそれ婦幼の耳目を解し易かんが為なり。畫も亦志うし。好古の君子幸に怪まざるなれ。

東京稗史出版社

鎮西八郎為朝外傳椿說弓張月前編卷之一

東都　曲亭主人編

第一回

信西博覽韓非を好　為朝稟性射法に達

清和天皇七世の皇孫鎮守府將軍陸奥守源義家朝臣の嫡孫六條判官爲義の八男冠者爲朝と聞こゆ。智勇無雙にして身の丈七尺。射の目嫩の臂脊力人に勝れて。よく九石の弓を支矢纏早の手煉あり。されど天性弓馬の妙奥を極むべき人にやありけん生れおがらにして弓手の肘馬手に四寸伸て。矢束を引と世に超つ。幼きよりその見識卓くして夥の兄にも處を置ぞよろづ己が隨意舉動ゐひける時に近衛院の仁和元年爲朝や、十三才におりゐひしが形狀に尋常の壯夫にも劣らぬ久後いかなる事をかなさん彼ゐ己が子おがらいと勇々しく犯ものゝことて父爲義も生平に舌を掉て驚嘆しゐひけるとぞ。この時鳥羽の上皇（諱ゐ宗仁）いぬる保安四年正月廿八日寶算二十一にして御位を第一の宮顯仁王に傳へゐへり治承元年六月廿九日に追號あ

東京稗史出版社

りて崇徳院と申をゐ是おりさきど天下の政ゐ大小とおく院(鳥羽上皇)より制度しゐひつるが保延五年五月十八日美福門院の御腹ゐ皇子(諱ゐ躰仁近衛院是ゑ)誕生ありしゐゑ上皇殊ゐ悦びおぼして。やがて春宮ゐたてまゐらせ永治三年十一月七日御年僅三才ゐして天子の位ゐ即まゐらせ。先帝(崇徳院)をば新院とぞ申ける。これみな上皇の御ゐからひより出たれゑ新院(崇徳)も推辭ゐひがたし只御こゝろの底ゐいたく恨みれゑして。御父子の中も疎しからゑ定ゐ御心の外ゐ御位捨去りゐへゑ。さこそと推量まゐらせおがら代謝世のあらひゐて早晩新院の御かたへゐ參りつかふる人えおく。公卿ゐゐ宇治左大臣頼長公少納言入道信西おんど僅ゐ五三輩ゐ過ぎ武士ゐには六條判官爲義父子のみをり〳〵參り慰め奉りける。しかるゐ有一日少納言信西新院の御所ゐ參りて韓非子といふ書を讀よし。その聞えありしかゑ爲義朝臣も聽聞の爲ゐ參りゐふ折しも若殿ゑらは。かゝる事を聞おくゐしかゑ。子ども多かる中ゐ八郎ゐゑ初て心勇けれゑいまだ學問をゑようせゑと覺るゑ御許を蒙らで召俱したりともさおで御咎もあるまじきゐ誇ゐへと仰すれゑ爲朝ゐこゝろえ侍りと回答つゝ衣服かい繕ひ。從者おどのどく打扮て彼御所ゐ參り御階の下ゐついゐて遥ゐ信西の說ところを聞ゐひけり。抑〳〵少納言藤原通憲入道信西ゐ山井三位永頼卿八世の後胤越後守季綱が孫(一說ゐ實範が孫と云々)鳥羽院御宇進士藏人實兼が子ゐて南家の儒流たりといへども高階氏の養子とおりしを以儒官ゐ昇ずこの人博學宏才ゐして諸道ゐ達もその妻ゐ雅仁王(後白河院是ゑ)の御乳母なりけれゑ上皇も二なきものゑと愛おぼして。朝政をさへ預り行ゐせゐふゐよくその職ゐ堪たりとゐ見えおがら。もつぱら申韓の法を用ひて賞を輕し罰を重くし勤もれば親疎ゐつきて決斷ゐ私ありし程ゐおぼく人の怨を惹り。かく朝恩ゐ誇るものおれど。いかおる心ゐかありけん上皇新院御父子の御中快からぬおりゐひて後もたゑを白河殿(新院の御所を申ゑ)へ參りけり新院ゐ日來思し召たつ事のおゐしまを故ゐゑ潛ゐ源平の武士ゐ御目をつけておゐせしがこの日事果て信西ゐ文武の古實を問せゐふ序ゐこが國往古の強弓ゐ誰ならんと問ゐへば信西が案やう本朝その人ゐとぼしからぬといへども吉備臣尾越盾人宿禰この二人ゐ不如ゐゐんと答奉れゑ又今の世ゐてゐと仰をるゐ安藝守清盛兵庫頭頼政いづれも覺あるものゐゐと申せしを爲朝もれ聞て意を齊を發し呵々と冷笑へり信西佶と見てこと不敬おり。あれゐ誰ゑらんと問ゑ爲義荅て彼ゐ爲義が八男ゐ冠者爲朝といふ

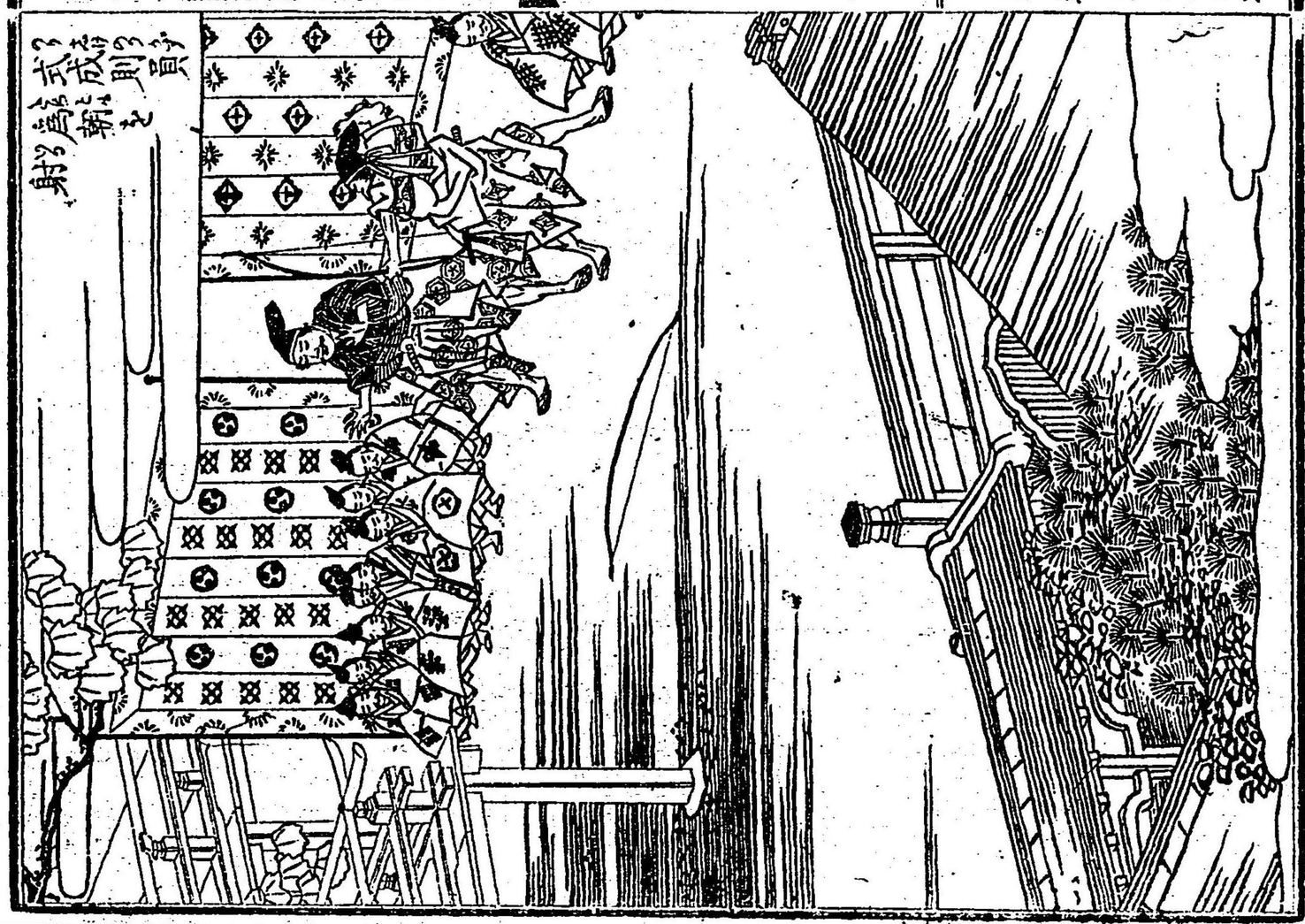
ものゝてひがかゝる席ゝつらおるべき身ゝにはあらねど新院おり居させ給ふの後ゝ人おけかゝミおゞを故ゝや誰ゝも限らぬ恭り仕るを御悦びましまをれば御免へ蒙らねど今日の講釋を外おがら彼ゝも聞せばやとて潜ゝ召俱して參りひと回答ゆひしかば。信西やがて坐をたちて。御階の下ゝ立より。しば〳〵爲朝の面をうち瞻りつゝ。この小冠若重瞳ゝして異相おり年にいまだ十五ゝも充ざるべ死がいとおとおびて見ゆるものかな。御身何事のありて玉座ちかたをも憚らぬ愚老を嘲弄ゆへるとい。と苦々しく問かくるを爲朝に驚ざゝる氣色もおく。世の人の言を聞くゝ通憲入道に博士ゝれにせども。親疎ゝつれて決斷ゝ私ありといへりしが果してたがにぬ今の世社弓とりを清盛頼政へと宣ふが傍いたくて。おもにぬ噴飯の咎を得ていなり但し頼政に物の數ゝも入りなん。清盛に武もおく文もおく幸ゝして朝恩ゝ浴るのみかくいへばとが佛を尊むゝ似ゝれど。愚父ゝてに爲義に。十四才の時勅を承りて奥濃前司義綱を攻亡し又十八歳の時南都の大衆朝家を恨たてまつる事ありて攻上るよ一聞ひしかば罷向ひて防げと仰下されゝ微頃の事おれば軍勢も整ぬ只十七騎ゝて栗栖山ゝ馳向ひ數千騎の大衆を追ひかへゝにとぞ只今ゝ至りてに年老ていかゝにやらん兄義朝おんどこそ弓矢とりてにいと心ゝくき者おれといふ爲義朝臣にこれを聞て彼よゝおき物あらがひして。こよおゝ禍をや引出さんとくかゝこみ退けかゝとおぼせども。玉坐ちかければ叱り退くるゝ及ぜ。この折ゝも左府頼長公も參りゆひしがこの問答をうち聞て。笑を含居ゆひける時ゝ信西膝をゝめやをれ八郎愚老が親疎ゝつれて決斷ゝ私ありとは誰がいひつる。頼政に近曽紫宸殿の上ゝ夜おゝ〳〵あらにきたる怪鳥を射て其名劣しく又清盛に左衛門佐たりゝとき内裏ゝ怪鳥ありけるを輙く射て落せしゝこの鳥清盛の袖ゝ飛入る。やがてこれを引出せば。大おる鼠おり。則南の臺の竹を代らせ竹の筒ゝ鼠を籠て清水寺の岳ゝ埋みて。おれを一竹塚といふ。おの事いしくもたかりつると人みお感ゞあへり。こゝちにみおきのふけふの事ゝて御身も親〳〵く見聞ところへ爲義がむかし攻ぜとも自滅をべき叔父の義綱を討武道ゝ疎き南都の大衆を追ひ返したる類ゝあらぜ又義朝ゝ於て。いまだ武勇の譽を聞かぜいかゝ是ゝてもおゝをが決斷ゝ私ありやといへば爲朝いよ〳〵冷笑ひ鳥に獺夫も射てとり。鼠をば猫も捕るおり。足下に文章の事ゝこそ賢かるべおれ弓矢の事に爭ゝりなにん所詮誰彼といたんも無益〳〵凡今の世ゝ弓矢をとりて。百万の強敵を退ん事に爲朝が右ゝ出んものあるべうも覺ひ

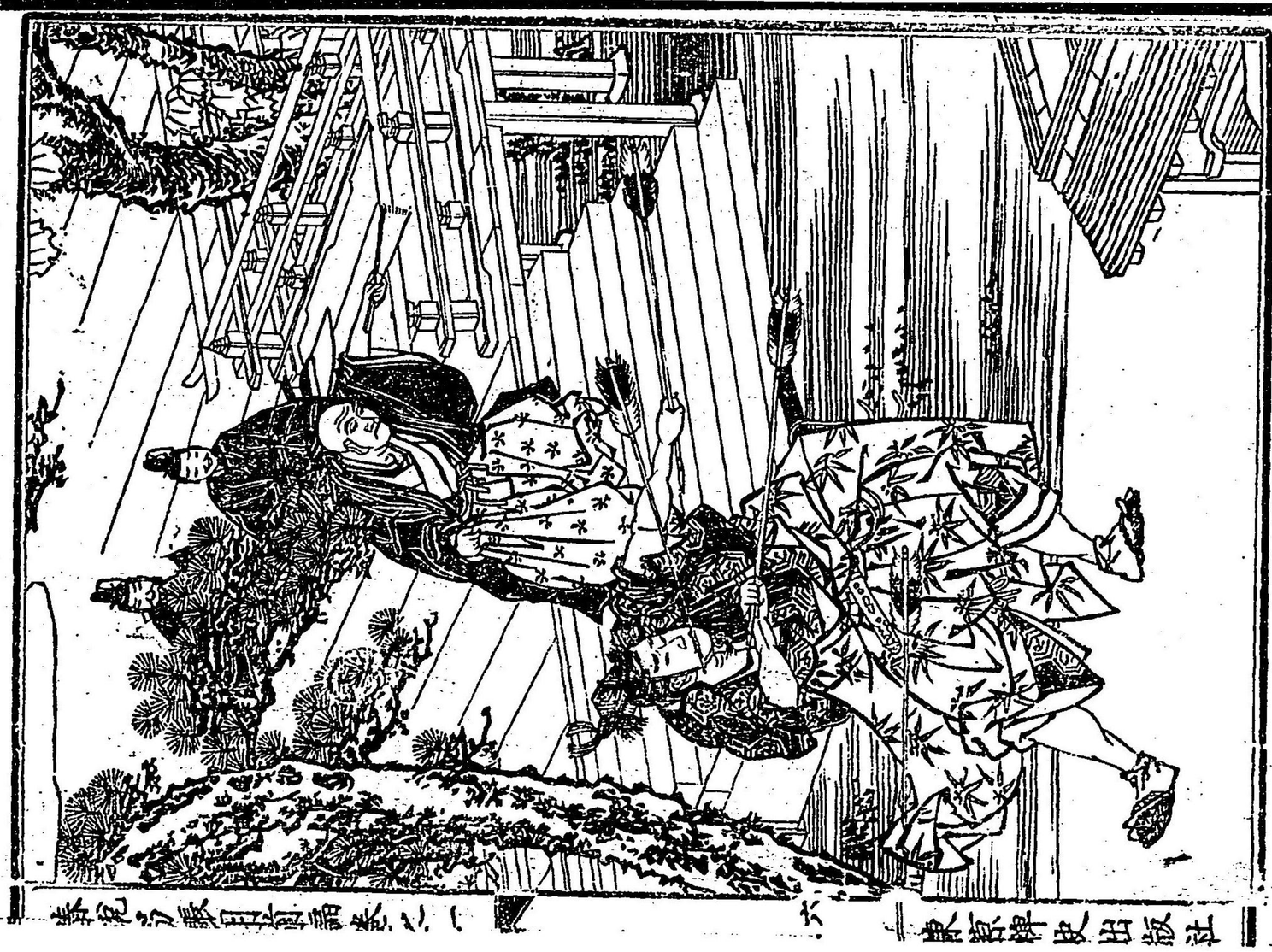
にもといへば信西聞て呆呆たゞし回答もせざりしみ忽地からく〳〵とうち笑ひ口に横に裂たりとていへばいにるゝものかな凡藝術に影の月を距年を隔切差琢磨の功を積されば。その極に至りがたし縦ひその身襁褓のうちより習ひ得たりとも僅十餘年に過ぎ。御身をづから思へ人悲水偶にあらぎ。己れ彼を射んと欲せば彼も又我を射るべし。よく射ものゝ又よく防ぐといへり今こゝろみに矢を取るべきかといへば爲朝聞もあへぎ。蒲衣八歳にして舜の師たり伯益五歳にして火を掌る賢愚巧拙に年をも論ぜへからぎ。いかゞある矢纏早にも仰せて射させなへ大悲の智惠の矢ありとも輒くとりて見せまゐらすべしといふ信西もにくめ程に。いたく懲さんと思ひつるに爲朝さらに屈したる氣色おければ。ふかく憤り。おのれが威勢の程を示さんとやおもひけん。つと立あがりて。誰か侍ふとく弓矢を手挾て參りにへと呼れば。うけなにりつと回答して。式成則員といふ二人の瀧口弓矢を携へ御階のもとに參りしかば信西見て。如此如此の事ゝ此小冠者に一矢つかふまつりにへと云この二人の瀧口に原白河院の武者所にて的弓の上手ゝ鳥羽院御位を傳へなひし後瀧口にめされぬ。ある時三尺五寸の的を給りて。これが第二のくろみを射おとして。持てまゐるよと仰あり。己の時になにりて。未の時に射おとしてまゐれり是既に養由に等しとて人みな譽のゝしりけり今年老たれど氣力におゐむかしにかはらぎ爲朝縦ひ六の臂ありともこのものどもが矢面を脫るべうも沙もにれぎ。左府頼長公も今に見かねなひて信西に對ひ爲朝に形容こそおとなびたれいにゞ黄口の童ゝ戲も人によるべし信西にはいと似げおくも見江つるものかおと宣ひしが又爲義に對ひて。とく〳〵そのものを將て退出にへと仰ける。このときまでも爲義朝臣に黙然として居なひたるが。かしおみて禀やう爲朝既に十三歳さのみ幼きといふにもあらぎ。もしこの期に及びてその事を果さぎは敵陣に臨みて後を見ほるにも劣れり。彼一人に惜むに足らぎ。恨らくに源家累代の武名を汚しにんん歟。只管御免を蒙りて。彼が隨意なさしめにんと宣へば。かゝるうへにともかくもと仰ける程に爲朝に欣然として信西に對ひ式成則員に無双の弓とりゝ。これが矢面に立ん事幸甚〻但しその矢をとり得ぎは。わが命忽地に終るべし。これに性命をもて足下に許を我又よくその矢を取得たらんにに何をかなにりにぞといふ信西含笑て。御身よく矢を取らば。わがこの首なりとも進らぎべし。信西に佛門の徒ゝ只今御身が射殺さるゝとも。死後おほあしくに報ひにゞと欺くを爲朝に耳にもかけぎ廣庭に走り下り。矢で

楠謙弥張月前編巻之一

ろをはかりて立たりける。彼式成則員ハ老功のものなれば。おの光景状見て思ふやう。おハ淺まし院の御所ゴて故おく兵器を弄さへあるゴ人を射殺させて樂とおぬゴ事。武烈天皇の惡き御行ひゴえ勝れり何とせんと躊躇を信西端ちかく立出て。とく〳〵と催促ゼ二人も今ハせんもべおく撩て二の矢あるべしと定められたまば。矢二條を手挾みて立むかへバ。君はさらおり當座の人々手ゴ汗を握り今の爲朝が命ハ日影まつおら露よりもおほ消やをかるべーと思ひ居れりけるかくて式成弓ゴ矢つがひ滿月のごく。引ぢぼり。矢臂をかけて切て發つを爲朝雖手ゴ丁と取る程もあらせを則員がはあつ矢胸下ちかく飛来るを是をも雄手ゴ受とめたり。おハ射損ぜし朽をしさよ縱射おゆをまでゴ至らぎともやハこの度ハ取られド。と兩人齊ーく引おりおばし透間を窺てよつ引驃ど發つ矢を一條ハ袍の袖ゴ縫留させ又一條ハ取るゴ間なおれば口もて楚と食留ーが忍地鏃を齧碎充つ。そは疾と陽炎の登るがおとく雷電の閃ゴ似て人間技とも。おぼえねべ。これを見るもの醉るがごく嘆賞あまりて膏だに得揚ぎ爲朝ハ取たる矢を。左右へ拯遣捨いでその法師首ぬハらんといひもあへぎ御階の上ゴ跳上り信西ゴ摑みかハらんとそるを父の爲義押隔て直ゴ挨地と衝落ー武士の家ゴ生またる身の偶矢前を避得ぎりとも敢めづらしとするゴ足らぎ。おかるゴその身の程をも顧ぎ鄙陋の舉動こハ禮おし。おハ漫ゑといひ懲ーぬゴ。額長公見そおハーて。やよ爲義いさくお叱りぞ信西も又心ゴとむべ充ゴあらず。むかしふたりの童ありて。日の出沒ゴつ充て。その遠近をあらそひしゴ。孔子もおれを辨ーがゴぬりしとぞ。今通憲入道が爲朝を伏し得さるもおれゴおおド。今ハ是までおり。おの〳〵退出ひへと。木ゴもつかや草ゴも附ぎ。彼是寛ゑひけり。新院ハ日来思ー召たつ事ありて。左府頼長と潛ゴ相語ぬひーが。御簾の間より爲朝が光景を御覽ド。て彼ハ物の用にもたつべ充ものゑとおぼーけれバ。御感斜おらぎーて。ふかく稱ぬひし程ゴ爲義も思ざる面目をほどこー。父子うちつれて退き出ぬ。この時よりぞ爲朝の名ハ世ゴ高く聞ゑ。おるされバ信西ハ爲義親子をいたく恨ゴ。おバ〳〵讒言して陷んと〜ゴりけるが。終ゴ保元の兵亂ゴ及びて。信西ゴりおくも爲義を召ぞ爲義已ゴを得ぎ六人の子どもを將て。御身方ゴ參りーゴその軍利あらぎして。新院ハ讃岐國松山ゴ遷さゴぬへり。こゝゴ通憲入道信西ハ爲義父子を憎む事深けれバゴやたへて久ー充死刑を申おこおひ。盛若野の五三昧より。左府頼長公の屍を堀出ー首を剉させ爲義父子以下新院の御身方ゴ參りたりー武士を搦捕せ。みおその首を梟

210053





たりし悪報にやよりけん彼信西ハ中納言信頼卿と權をあらそひしより。いく程えもく平治の逆亂起り寸の劒首にかゝるといふ天文を見て都を落田原の與おる大道寺の玩ヨ竊て生おがら土中ヨ瘞れしを敵兵探り索て堀出し。その首を取りて六條河原に梟てけり亘おるかお信西ハ已を博士ぶりて人を拒。罰を重くして衆の恨を顧ざりし。因果新面見るとよとこのころの人みおいひ罵りけるとぞ。

第二回

路ヨ迷ふて猴の戯を止め
舎ヨ伴ふて猴酒を勸む

この日爲義朝臣ハ館ヨのへりゐふとやがて爲朝をちかく招さ御身いかなれば貌姑射の山の尊死ヨも怕れぞ織素の年ヨありおがら長者をも敬ぞおば〳〵脣を轉せしハ何事ぞ夫孝ハ身を立るヨあり一朝の爭ひヨその身を許して式成則員が箭面また つ事粧人の行ひヨ齊し兵法ヨも將驕るとおにハかおらぞ敗るゝといへり智あるものハ爭ハず能あるものハ誇らぞとぞいふおる。今日の動止不忠とやいハん。不孝とやいハん。向後をよく〳〵慎ひへと教訓しゐへば爲朝畏みて父の命さるとおまど彼通憲入道信西ハ賢者ヨ似たる佞人ゝ。その身一院(鳥羽上皇)の寵遇を得て當今(近衛院)ヨ昵近し奉れば他人ハとまれかくまれ彼ハ世の聞江を憚りて新院の御かたへハ疎かるべ死ヨ。さハおくして親く參りつかふる吏誠の志ヨあらぞ潜ヨその光景を見まゐらせ。怪しとも思ふ事のあらんヨハ上皇ヨ告まゐらせん爲の間者おり爲朝豫てこれを知るが故ヨ今日言を設て者奴を怒らせ。ふたゝび白河殿(新院の御所を申す)ヘハ足踏もさせまゞうおそ思ひひおれ。といと信たちて私語ゐひけるおばしありて爲義又宣ふやう。いましへより官ヨ怕れぞして管ヨ怕れよといふ事あり信西ハ君寵ヨ誇るもおおり。彼ゑしふかくヨが黨を憎まば。ヨが家彼が三寸の舌ヨ亡さるべし。御身明日筑紫のかたへ下りて。この禍を避よ但し思ふ旨あれば音耗ハをべからぞ。とく〳〵旅の用意をも致しハへと宣ひければ爲朝ハ父の氣色あしきを見て。ふたゝび言葉をかへしゐハず。詰朝乳母子須藤九郎重季只一人を召俱して都の空もをみ果ぬ月も西へと入うたのその曉の星を戴紀。おゝろ筑紫の果までもと立出つゝ日數經て豊後國まで来ゐひしが。この國ヨ名たゝる尾張權守季遠ハ由緣ある人おれば。おばしおの人をたのみて見ばやとて立よりゐひしヨ季遠易くうけ引て養ひまゐらせし程ヨ。こゝヨ三年の月日經て爲朝既ヨ十五歳才學まを〳〵もゝみて智勇拔群なりしかば。經傳兵書ヨ思ひを耽らし又

折ふしと弓矢を携へ。木綿山（府の西にあり又丹後に同名あり）に狩くらしぬふに有一日只ひとり山ふかくとけ入りて路にまどひ行ども〳〵舊の山路に出ぬにも只見まゆくさきの樹の下に猴の子二頭ありて鹿の宍を爭ひ齧あふて生死をかへりみも。互に半身血に塗れ勝らも劣らも見ゆ。爲朝一ばし停立てつら〳〵と思ひけるに今の世の人どゝろに笑の中に刃をかくし利を見ては親疎をいらまも官位の高さを猜み食祿の少きとも爭ひ父子も讐敵の思ひをなし兄弟鋤を削る事この猴に異ならも。今この獸のたゝかひに我に觀念を勸るのおかだちん。さらば助得させんとひとりごちもゝこを對ひて宣ふやう汝等にこれ勇猛神あり。今食を爭ひて互に疲つ死傷む事あらば。これ勞せもして兩ながら獲んも容易し。夫食に別に求るともおほ得べし。生とし活るもの一たび命をはりなば求るに道なかりなん。とく退けよといひをはり弓の末を挿入れて一反丁とはねなへば彼二ッの猴に大力の弓杖に支られ在右へ撲地と顚臥しがふたゝび挑こ戰んともせも流るが鮮血を舐あひて忽地睦しう見えたり且くしてこの猴爲朝を熟〳〵うち瞻りてもろともにほとり近う來つ頭を低て恩を謝もるがどく見ゆ。さてにわが一言に感伏して和睦まつるものあらん人蚊雄なればこゝを虎猴に比

も今この光景を見れば彼等却て義あり信あり。さのみ憎むべ紀ものにあらもと宣ひつつ手をもて項を撫なへば。猴に尾を掉耳を低ていと押たる氣色おりしがやがて前にたちてまづやかに歩を出まば〳〵見かへりて鄉導をるを爲朝もはやくそのあゝ爲を得て二頭の猴に導れゆくこと十五六町に及ひなふあろ何とかーけん彼猴に俄頃に尾を卷く走りかへり物に怕るがどく見えしかば爲朝ふかく怪こて向ひを佶と見なへば一叢芒のまげき中より一人の男あらはれ出たりそゝ打扮頭に鹿皮の巾頭を被り身に拷の衣着て脚に桃榻皮の脚半を結び腰に長き刀を服て身の丈六尺年紀に三十あまりとおぼーくして山の樵夫かと見れば弓矢を持もあれ引剝もる山客おらんとてあか〳〵に憚りなふ氣色もおく弓杖に携てそあたを瞻おはしける彼男も爲朝を見てちかく歩み來つ禮儀を正しくしていへりけるに君に近曽この州民の稱まゐらする。八郎御曹司にてまーまもべ。今この猴のよく押たるを見まゐらもれば久しく養なふものにや斯いへばおゐ怪しともおぼさんが。それがーに紀平治といふ樵夫おり。祖父に元琉球國の人おりしが一年漂流してその赦筑紫に著ーかば遂に日本に留りて。肥後の菊地に奉公せり。しかるに祖父没ーて後父おるもの故ありて浪人ーこの豊後に

移り住むといへども世ゑたる便おれまゝに獵夫の業をなして一生をおくり。それがゝに至りてもおほ業を更ぜ父の時より鳥獸を捕に弓矢劔戟を用ひず只礫をもて狙擊に百發百中の手煉あり凡八町の内に寛を定めて擊と死い疾き鳥勇死獸といへども打殺さずといふ事おゝこゝをもく人口順し渾名して八町礫紀平治太夫と呼びてひ。そ是がし今かく村落にありといへども聊青雲の志おきにゝもあらずよりて君が文武の道に富て。ひろく人を愛ゝ人事を傳へ聞渴望甚ゝかりつれど身賤ゝければ見えまゐらせるによしおかりしを意外もこの深山にて尊容を拜ゝ奉りゝ僥倖何かこれにまさる事のひいんとぞいへりける爲朝聞ゐひてきていこの猴どもが怕れてをゝみ得ざりゝ紀平治があはをもてなりけん。かれば彼が礫に妙ある事ゝかるべゝとて。心ゆ中に感ゝおぼゝ叮寧に田舍ゝして路に迷ひゝる事猴の事おどをべて物がたりゐへば。紀平治只頷嘆賞し。君が德既に禽獸に及ぶ事いと〳〵有がたくも賢おいゝまを以終日路に迷ひゐはべさこそ餓もしゐひけめ。こが家にこの山の麓にあり。もし芳屋を厭ひゐゝをゝ立よりて憩ひゐへ。といふに固辭がたく打つれだちて麓のかたへ赴きゐへば。彼二頭の猴も後方につ死く門まで來にけり。紀平治ゝふりたる諸折戸をやをら押明て爲朝を入れまゐらせ。妻孥よびておか〳〵の事を語り聞せれば妻も又夫に齊ゝく。こゝ爲信々しきものおれむ。粟の飯に鮎のおら燒とり添て爲朝にをゝめ進らするにぞ。紀平治も草鞋脫をてゝ裡面に入て。これゝ荊婦にて名をば八代と呼てひ。御目をゐゝりひへゐゝと申せゝかば爲朝もけふの惠のうれゝきよゝを聞えゐふ。紀平治ゝ又一瓶の酒をとり出て爲朝を管待まゐらせれば是を喫ゐふに蒲萄酒に似て味ひ異ゝこゝ何をもて釀せしものにやと問ゐへば。紀平治答て是ゝ山中稀にあるとおろのものにて。猴酒と名づけひ。秋の末に至りて猴ども菓を貯んが爲に許多とり集て古木の虛巖の凹おるところおどに藏め出くに。月を經てその菓悉く潰おのづから酒のどくにをりてひ。去ゐをども山を家とをるものも多くゝ見るとなきをそれがゝ近曾見出して汲て持かへりゝといふ爲朝聞ゐひて掌をうち山中にゝさるものありと聞つれど都に生育たれば見たる事さへおゝこれもゝこゝにさをらはぞゝ爭かゝる管待にあふべきと宣へば紀平治も笑坪に入りて。おほあば〳〵勸め進らせゝが。わを恣をたる事こそあれ彼等もさぞお餓つらめとひとりごち門方に出て二頭の猴を呼びつゝ。切たる鹿の股を投與ふれば妻の八代はあれを見て大に驚き怕るゝを紀平治うち笑て緣由を物かたるにぞ。や

うべくこゝ伐安堵けり。かくて紀平治はふたゝび舊の處に參りて。四衰八衰の諸の序に。あべ一兵法を討論せしが爲朝の說ぬゝ所悉わが聞ざる處に出て。其才測がたく見ゆなへべ心を傾て感伏し遂に主從の契約をなしつ。この物がたりに時うつりて。日も既に暮にければ爲朝は別を告て立かへらんとしぬゝ折しも乳母子須藤九郎重季は主君のゝへり遲きに心もとおく篝火ふりてらして彼此を索つゝ。やゝこの處へ來りしかば。爲朝は重季を召て紀平治が事狼の事おど說示ぬへべ重季も夫婦が厚紀志をよろこび聞ゆ主の俱して立かへるに彼狼はおわその後方にあたがひ來て追ひ逐れども締りゆかぞこの夕より爲朝の住ぬへる子舍のほとりを去るとおわれべ爲朝も又これを哀み一頭をば山雉と名づけ又一頭をべ野風と呼びてさおがら畜犬のどくにてぞありける。

第三回

山雉首を喪ふて主を救ふ
重季軀を死して珠を全を

八郎冠者爲朝は一たび八町礫紀平治太夫に面あはせしよりふかくこれを愛よろこび常にその家に交加く彼とともに狩くらし更に外を求ぬはぞその山に遊ぶ日も彼二頭の狼のうちおあらぞ一頭を率て行ぬひしがおのづから獵犬のどくよく猪鹿を追出し多くは主に手を下させぞおのれまづこれを齧ころして獻らせけりあるとき須藤重季主を諫て稟やう君は正しく清和源氏の嫡流として大國の守ともありぬふべき身の。一旦大敵の勘當を受ぬひたれべとて忽地武道を忘却し獵夫の業と事とし給ふミそこころを得ね人は氏より育にしたがひ朱にまゝはるものは朱くおるといふ常言にも恥ぬへかしと面を赤して申せしかば爲朝含笑て汝がいふ所理りおり。しかはあれど。それ今さをらへ人とおるといへども志を紗をにあらぞ權守季遠はそは器量狹く賢を揭みて己に勝れる彼諍ものゝこれおく彼が養ひを得て。嬾忌の中に月日をたくり。もし遠き慮おきと知は禍簫牆の下より起らん。こゝをもて終日山に狩くらし外を求ざるの狀を示をものは季遠が心を安めん爲おり見よとが獲とる獸をべ。みお紀平次にとらせて彼が生活の助とも是にてもとが小利を貪り山獵をもて身の樂とせざる事をしるべしと私語ぬへべ重季大に感激しさる事とも思ひと知まへぞ賢ぶりて諫まゐらせ。よしお知事申つるこそ越度なれとかしこみていと娛し氣に見ゆるこの下に話おし。かくてその年もくれて春も彌生のはじめにおりつ爲朝既に十六歳今は一個の壯

夫まおりぬへば重季ハこれを見てもし都まましまさば除目行るゝまに序まに官人の數まも入りぬふべきまこの邊邑まきをらひて家ハやうやく數間まに過ぎ住むハ主從二人ん戀しぬハん爲おりとも四年が程まに只一たび家信も聞ねぬハぬ大殿の御おゝろはよしと佗し死まゝまに世をうらむ誠心の程こそ有がたけきかくて爲朝ハある日朝まざ死より弓矢を携山雄と呼べる一頭の猿を牽て木綿山まに趣んとしぬへば須藤重季主の袖を引てそれがし前夜夢見もあしく覺て後も何とやらん胸うち騷ぎて心持穩おちぬ願くハけふの山獵を止ぬへかし。といひもをはらざるまに爲朝うち笑ひて夢ハ五臓の勞まに成といへりかゝる事を諱んハ婦人のうへまにあるべし汝心を安くしてよく留守せよと宣へば重季又禁やうゆまにしへの人も事まに臨てハ懼よといへりされど止りぬはゞとおらば重季をも召俱しぬへかしとしば〳〵請て已ざりし程まにかくまで思はゞ何か拒んまれとゝもまに來よと仰て出ぬへば重季歡こびて蕉火まに路をてらし主の供して立出けり。さて爲朝主從ハ木綿山の麓おる紀平次が家まに立よりて彼をも伴ひゆくべしとて音おいぬへば八代立出てまづ湯を進らせ夫紀平治ハこの曉まに山へとて出ぬ。されど出てより程もあらぬまに追蒐ぬハゝ山の半腹までは追つ死ぬハんといふさらば急げとて主從其處を走り去り足まに信せつゝ山ぬかくわ弟入りぬふまいまだ夜もあけざれハゆくさ死暗くして遂まに紀平治を見ぞあまりまに疾走りて疲勞ぬひしかばふりたる楠の下まに立より主從袂まに尻をかけて明ハおるゝをまちぬふまに只顧瞻をもよほしてもろとゑまに目瞻みぬふとやがて彼山雄一脊高く吼主の行勝のはしを銜て引まに不れば爲朝も重季もあどろ死覺て四方を見かへりぬへど眼まに遮るものもあしてハ山雄が蹴るゝよとおぼして又瞻りぬふまに彼いたく吼かゝりて齧もつくべき氣色なれば爲朝佶と齧して虎猴ハ押たりといへども畜がたゑといふぞ宜おるこの畜生わが瞻れる間を窺ひて喫んとをるまにおそさもあらばあま目まに物見せじといきまきて刀の鞘を握まもちしば〳〵睨つめてれハしける重季えこゝろ緩さぞをハといハゞ刺留んと瑾くつろげて瞻居たるまに山雄ハこの氣色まも怕れずなほ吼ること二脊三脊忽地走りよらんとをるを重季跳かゝりて丁と切れば猴の首軀をハなま楠の梢まに閃き登ると見えつるが鮮血さと溜りつゝ頂の上より落る物ありて大地まに控と響しかば主從ふたゝび驚死怪み押明がたの星の光りまに眼を定めて見ぬへば太ゑおの楠の幹まも劣まじく長いくばくとも量がたき蟒蛇の吭へ猴の首齧つ死つ蟒蛇ハおほ半身ハ木

まついりて蠱くを主從刀を拔もちて刺とほし刺とおし輙くおれを殺ぬひしが爲朝ふかく慚愧して。おの蟒蛇い楢より。ヨれを呑んとしたれば。おそ山雄がしば〳〵吼かりて裳を引てしらせしをおい寇をるかと一ゝもぢヨ思ひたがへし愚さよ。彼今重季か一刀ヨ死をるといへども一念首ヨとゞまりて主を救へるぞ殊勝おるヨれ過てり。〳〵と宣へい重季いおほ面おくて頻ヨ落涙ヨ及びしが且くしていへりけるいそれがし嚮昔夢見のあしかりつるもこの事あるべき祥おりしそえ狼もら恩義を感ゞ身死して主の寇を殺すヨれい獸よも及ぜして年來傅犯まおらせながらおを君恩を報ふヨ至らを却て山雄を殺せし事恥ても辱るヨあまりあり。こい何とせんと悔うらめば爲朝いおれを勸彼を哀みて已ぬいを。この時夜もや〻明いなれ連山見る〳〵雲起りさしも今まで晴たる天油然として結陰風颯と吹來る程こそあれ時しも三月のいゞめヨあれど電光間なく閃き雷さへおど禍おどろしく鳴ヨたり直ヨ頂の上ヨ落もかゝるべき光景おれは爲朝しば〳〵雲間をうち瞻傳へ聞蛇數百年を經る時い身の中ヨかおらを珠あり龍是をおるとあれば。その珠を取らん爲ヨまづ雷公を違りて震をるとかや思ふヨこの蟒蛇ヨい珠あるべし重季試ヨ裂て見よと仰それば承りつと回答して彼蟒蛇の吼のあたりより再び刀を突立て。これを裂んとほるヨ雨い盃を覆をがごく降おがし雷の鳴事おほ〳〵劇し爲朝いもし雷公の墮かゝる事もあらば射てとらんとて弓ヨ箭つがひ少しその處を退きておいしける須藤い雨ヨひたと濡つゝかゝる雷公をも物ともせを既ヨ尾のあたりまて裂て見れどおれかと思ふ物もおし。もし珠い頭のかたヨやあらんとて刀をとりおほし頭の皮を剝て腮の下を探り見るヨ骨の間ヨ物こそあれ。それ是おらんとうきしみて引出さんとする折しも四方晦瞭として一孫の黑雲須藤が上ヨ捲ひ累り一聲の霹靂天地も動くばかりに鳴落るを爲朝より引て彫と發つ矢少し手ごたへほるやうなりしが忽地に雨止雲おさまりて旭東の岸ヨ昇れり爲朝い重季が事いと心もとなくて晴るゝも待を走りよりて見ねふヨ哀むべし重季い腦碎肉壞れ全身黑く黶て肢體はつゞ充たる所もなけれどもてる刀さへ放さを左手い血ヨ塗れながら一顆の珠を握り持て死たるが雷公いおゝより昇しかと見えて十圍ヨもあまる楠を斧もく割しどく梢より根の際まで二片ヨ裂てあをしかど爲朝いそれヨ眼もとゞめねいず只管重季が横死を哀れみ。ヨれ血氣の勇ヨ誘り求て危きヨ臨と兩度ヨ及び前にい悞て山雄を殺させ今又須藤を喪へり縱百朋の珠なりとも一人の家隷

に換べきや殊さら彼れ此年来憂に冊きく信やかなれば思ふ程をもかたらひて心やりともおしたるに夢見のあしとて諍たるに爰にて死ん祥こしさいへ日来ねろくはかり勇者とも覺ぬに。その身雷公に擊るゝとゆへどもよくその珠を全き彼鬧相如が忠にも勝れりさてよしなき技をたつるかなと後悔ありて心更にたのしきぬにかくに須藤が志を他にせゞとおぼしかへして。やがて彼珠をとりて見ぬふに晃々として明月のごく世に類おなき名珠おを洁所に前面の崖道よりいたく濡れて来るものありけり誰ぞと見ぬへば是へ町礫の紀平治おり彼も御曹司おりと見てければ忙しく走り来つ須藤が雷死。山雄蟒蛇の光景を見て大に驚きまづその故を問まぬらすれば爲朝に愁然として涙を含み一五一十を物がたりぬふにぞ紀平治いまを〳〵驚てふかく重季が死を哀ぶ又山雄を最惜つゝとかくして楠の根を掘穿て重季が屍を埋めその傍へ山雄を埋めてさて何をか標にせんといふに爲朝手づから大おる二ッの石をいと輕やかに持来ぬひて墓碑としつゝ瑰生天脫苦與樂と念ずつゝ紀平治とゝもに山を下りぬふに細き渓川を隔しむかひの峯よりさし出ゝる松の枝に年經る鶴のかゝりて飛んとをれどもかなわを只管羽たゝきして煩悶る氣色おるを爲朝遥に見そなはして彼鳥の足にに糸おどを著たるものおらんか。その緒のはしの枝にまつわりて飛得ざるにおそと宣へば紀平治も點頭てさらばそを見がし礫をもて打おとしはんんといひつゝ寛よるを爲朝忙しく押止め礫してこれを打ば命立地に終るべしいでこれ傷のつかぬやうに射はなして重季等が供養に放生會をるを見はへと仰ん果ぞねらひ濟して丁と射ぬふに鶴に忽地枝をはおれて渓川へ落たりしが左右おくも飛あがらぞ紀平治はこの光景を見て簪竹に手繰つき藤蔓に携つゝかからうゞて渓底に至り彼鶴をかき抱き舊の処方にたちゝへりていふやうおの鶴いたく羽を損ひしと見えて飛去るべき氣色にあらぞ御覽はへ足にはさゝやかおる金の鏃を著ていがおの鏃の枝にまつわりて引とめられたるを一矢に射切ぬひしかば輙く枝を放たりとおぼしおかるにその鏃のはしと見えて鶴のほとりに落散れるものを見るふ黄金の牌にてはへばこれをも拾ひとりてはとて彼牌を見せまおらすれば康平六年三月甲酉 源朝臣義家放焉と彫つけたれば。うち驚きて宣ふやうむかし奥州前九年の戰に。ゝが遠祖頼義父子夥の逆徒を誅戮しぬへるをもて。ふかくおの事を歎さぬひ貞任宗任退治の後討とるところの兵どもが耳を刈て洛にのぼし六條坊門の北おる西の洞院のほとりに埋みて上に一宇の堂を

建立しぬへり。今の耳納堂これ。このころ義家朝臣も彼地にて亡者追福のため夥の鶴に黄金の牌を著て放しぬひしと聞たるが是もその一隻なり。康平六年より今茲久壽元年に至りて九十八年。時に今三月にして。日も又けふに酉なる事いと奇しあの鶴足に牌を著られて。愛とえ思はざれば。おそかく西海の果までも飛來りて乾坤に徜徉せしに偶その鑿。松が枝にまつはりしに向の雷に驚きて。この過をしたるらめ。されもしさらで過りおば。鶴は遂に死をべきを曾祖義家朝臣の神靈。これを導きてこの鶴を救はせぬふものあるかと。一ト たびはかしこみ又一たびはうれしみて。緣故を說ぬへば。紀平治も奇異の思ひをなし。ふたゝび鶴を抱て爲朝を館まで送りまゐらせ。やがてこが家に歸りける。さる程に爲朝は彼鶴をふかく勦り。鉛に巷ひて手づから飼を與へ。水を與ぬふに。いまだ幾日もあらぎして。健にありぬ。是より先爲朝は彼日にが住む子舍にかへりぬふとやがて。殘りとゞまり一頭の狼野風とよべるが尾をうち掉。端ちかう來りしかば。何とおく哀れにおぼして。けふ山雄が死たる事ども。人にものいふがごく聞えぬへば。野風はこれを聞もあへず。頭を低れ涙さしぐみて。ふかく愁る氣色なり。この光景を見ぬふにも重季が事いよ〳〵痛しくて。その夜僧をむかへて經を讀せ。かの男と山雄が爲にお

がく追善の佛事を催行ひけり。

鎮西八郎
爲朝外傳 椿說弓張月前編卷之二

東都 曲亭主人編次

第四回

老猴搭ゑ登りて主を辱しむ
病鶴茹を出て恩ゑ答ふ

八郎冠者爲朝ハ重季山雄を喪ひてより。こゝろ鬱々とたのしみなゝを来しかさゆく末の事おど思ひつゞけて春の夜の短宛も寢覺がちなる夢の中ゑ一人の女子白綾の袿ゑおおゝい袴の袴着て紅なる一枝の花を頭挿たるが端然として枕方ゑ立在ていふやう近曽君が養ひを得て吾身恙おかりつるうれしさゑ今告まゐらをべき事の侍るゝ。君明日ゑらゝを將て肥後ゑ赴き阿蘇の宮のほとりゑて。わらゝを放なゝゞかおらむ艶ゑして且賢き妻を娶りよろしき後楯を得なふ事あるべし吾身殺處ゑて別まゐらするといへども久しからぎして南海の果ゑて見えまゐらをべきゑこそといふとおもへば夢さめなへり。つら〳〵この事を考なふゑ近曽養ひを得てその身恙おかりつるといひしより彼女子が摸樣を思ふにゑが得たる鶴既に神ゑ通ゑとゝれゑ古祥を告るよと思しけれゞ聊も疑ゝを詰朝主人權守季遠が母屋ゑ到りて物がたりの序ゑその事

とにおーゝ宣ふやうそれがし近曾一隻の鶴を得ていがおれに曾祖義家朝臣の放せしものゝて現に黄金の牌を著たりおゝを肥後國阿蘇の宮へ納まゐらせよといふ靈夢依蒙りていに苦しからぎに彼地ゝ赴きいべしと聞えぬゝ權守に聽て爲朝の智勇を尊怕れ久しくゝが方ゝ置まゐらせおべ終ゝに所領の地をも奪はれ身の仇とえおりもやせんと思ひ居れる折おれべおに僥倖へと潛ゝよろこび肥後ゝに阿曾平四郎忠景が子ゝ。三郎忠國といふ武士ありて領地も廣く家も富さゝへていに彼人などゝ便りぬにやとおゝ在をゝ賜るべしよしそれまでゝ至らぎともしべし彼袖垣ゝ詣ぬえん事何か苦しうひべきとく〳〵起程ぬへかしと回答せしかべ爲朝ふかくよろこびおぼしくやがて野風と名づけし猥をべ紀平治が家ゝ預遣して旅ごちの事をも告しらせ季遠が下郎二人を傭ひて鶴を如おがら扛擔せ田舍待の私ゝ物詣をるどく打扮て次の日肥後國へ赴きぬへり話兩頭ゝ分るこゝゝ又肥後國阿蘇郡ゝ阿曾三郎平忠國といふ武士ありけり。阿蘇記摩球磨の三郡を領して家隷居多もてりしが娶にはやくなき人の數ゝ入女兒只一人ありく名をゝ白縫とぞ呼びける今茲二八ゝ春をむかへて姿句やかゝ艶ぴたれば。ゝが嫁ゝせん。われ壻ゝおらんとて彼此よりいひ來せども白縫さらゝうけ引を是いかおる故ぞといふゝ姿こそかく風流たれ。その心ざま勇して壯夫ゝも劣らぎ生平ゝ太刀を合せ矛を使ふ事のみを好しかべ腰元おる女の童ゝ至るまで長刀の一手に習ひ得ざるもおくその情慮天が下ゝ肩を比るものおき智勇の武夫ゝあらぎに身を許さゞと誓しかべ遂ゝ心ゝかおふ人もおくて婚緣とゝのにざりけるとぞ。しかるゝ白縫の年來畜押て。ふかく愛る一隻の猴ありけり。この猴よく人の言語を解得立舞ことをも敬し得たるが年を經てこの形狀やゝ大きうおりて今に八ッ九ッの童ゝに勝るとも劣るべうに見えざりし折しも三月の下旬なれべ庭の遲櫻を手折らんとて。ゝか葉といへる女使を樹下ゝおり立せ白縫に彼猴を牽て椽頻ゝたち出此枝彼枝と指し示ておにしつるゝ猴に若葉が手をそらさまゝして裳もあらにおりけるをつく〳〵と見て居たりしが忽地走り下りて抱きつくを若葉に阿呀とうち驚つゝ退きつれど猴におぼ追ひ携りて淫ゝんとせしほどゝ白縫見ていたく腹たて汝畜生ゝありおがら人を辱めんとをるかと罵もあへぎ長押おる長刀の鞘を外して直ゝかけんとを猴にこれゝ驚怕れ假山のおたへ逃ゆくを主從此彼を追まにをゝ立間をくて。いづ地行けん見えぎおりぬ。もし立歸る事もあらべ強く縛めよと仰せて。その音信れをまつゝ日に暮ゝけれど

東京博文館版社

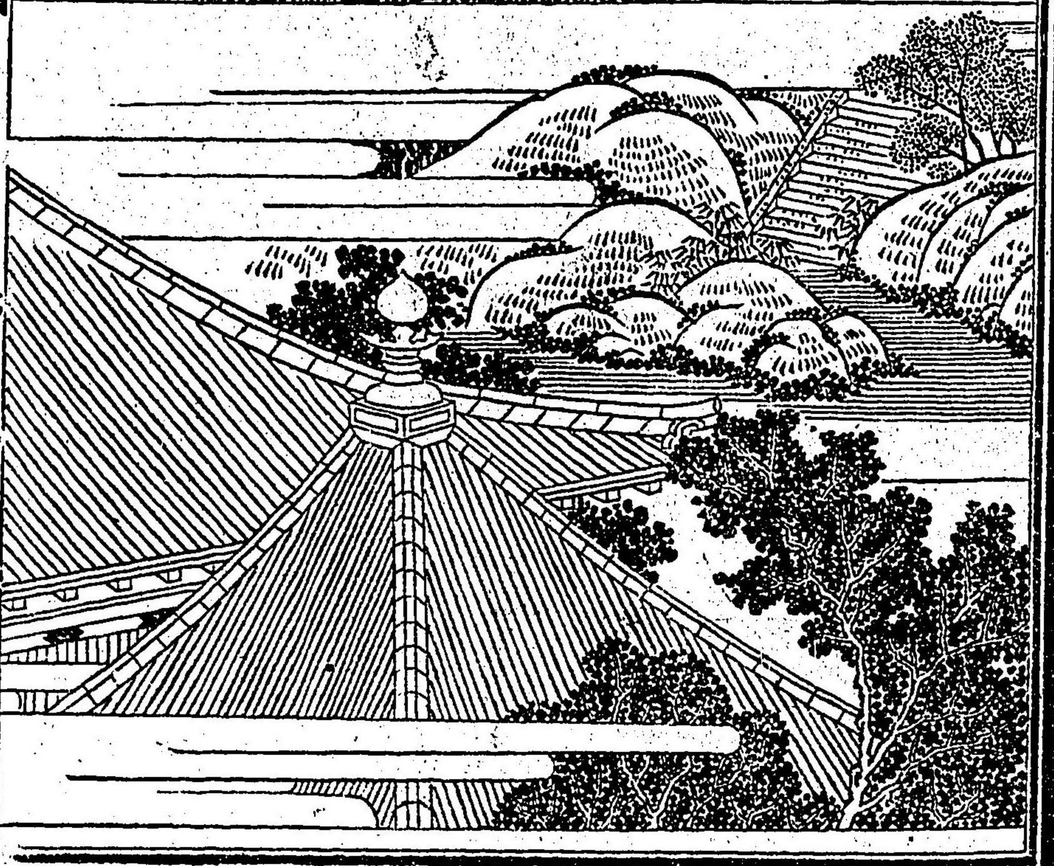
かへり来ぬ今は逃れて遠く山まや入けんとてさて已ぬ。かくてその夕彼ま葉に宿寢まあたりて白縫の枕方ちかう臥たるが。春の夜の短宛まにかき女子のいざたおくて前後もしらぬ既まに夜もいたく更て丑三の漏刻もかをかまに響く折しもあれ何とかしけん彼若葉が叫苦一聲まに白縫も驚き覺て首を擡もむ燈燭滅て善惡もまかぬ人やあるく〳〵とし〳〵喚寤され次の間まに臥たる老女寢惚〳〵る聲まに回答して起揚しがこゝまも灯の滅たれば。こは何とせんと連忙宛。かいさぐりつゝ索れども間毎〳〵の燈燭とゝくおかりし程まもを〳〵騒ぎたちとかくして火燈索め手燭まうつして走り来れば。こはいかまに女使ま葉は吭を突破られ朱まに染て死たるほとりまに血を踏たる足跡ありて全く人間のどくおらねば主從おどろき怪みゐ〳〵白縫しば〳〵し沈吟して。この足跡をよく見るまにまがふべうもあ宛猴は足へ。彼けふ逐れつるをふかく怨み潛まかへり来て。間毎の燈火を滅ぬ宛しは。わか葉を殺しを逃出るまに便よくせんが爲おりとおぼし。蹤血を認て捜せよかしと仰をれば老女こゝろを得て廊下を見るまに遣戸まに鮮血を引て樽子を押破りたる處あり。血はこの處まを止りしかば猴はこゝよを入りて又こゝより逃出つらんおど罵る間まに居多の女使ども。やゝ走り来て駭ささへぎ手まに〳〵懷劍を取りて探索れども更まに見えぬ。この時父の忠國も忙しく走り来るまに白縫は憤りまに堪へぬ。猴が若葉まに淫れんとしつるはゝとめより落もおく物がたれば忠國聞て大まに怒り。そは許をべきものまあらぬ。とく物まに心得たる郎等を召せと焦燥ば一人の女使走りゆ宛て。その旨を告しらするまに時も紗さぬ手取の與次同與三郎。大矢新三郎。越矢源太。松浦二郎。吉田兵衛。打手紀八。高間三郎。同四郎おんど一人當千の家隷ども。みお庭門より走り来れば。その時忠國端ちかう立出て。如此〳〵の事へ。木を伐草を刈ねらひても彼猴を追ひ捕て打殺せよ。といひ宛まを宛あらく仰をれば皆承りつと回答して東西まに走りまかれ。蕉火ふりてらしつゝ館の四隅を索るまに。こゝえてその音だまにせぬ。こゝまに西の衙門いかたまあたりて只今築垣を越て逃出るものありけり手取の與次月影まに透見て手戟をつけんとしたる時忽地松を木傳ふて外面へ跳立けり。そは猴は門外へ逃れ出しぞ。とく逐ぬへと呼れば衆皆おゝまに集来て門をきと押ひら宛飛がとくまに追蒐たり。學まに門蘇山の片ほとりまに文殊院といふ古寺ありけり。(あの寺今はあ一同國熊本まに同名の寺あり。おぼ考べし)弘法大師の開基まにして。しかるべき伽藍んとぞ件の徒は此寺の門前まに彼猴を追つめて。今は易しと思ひの外猴は築牆を跳こえて裡まに入り搭の火珠まに走り登りぬ。

まづ彼が往方に見定めたり。いやく裡に入りてこそといきまきつゝ慌しく門扉をうち敲れ。門番忠國が家隷どもしかく〳〵の事にて来れり。門を披きたへと音おへば門守の老翁をいと回答さるばかりにて頻にも披かをきたれば〳〵音おひて後ぞうぞく門扉披しかば。衆皆裡に入りたまど。輙く捕へんやうもなければ。むおしく塔をうち瞻り明ゆくそらを待のみゝ既に東えしらみ鳥の森をいおれて鳴聲をるに山際むらさたちて陽旭少し出ころ忠國も馬をいやめて居多の士卒を領て来りしがあの光景を見てあれ射て落せと焦燥どもこの塔五重にして高れ岳の上にあり前にいは怪松屏曲として枝をまトへ。霞を籠雲に聳孚々としてゆくゞく孤高をあらを縱横由孚充用おりとも射てとらん事かおふべくもあらを愈に射損ずおゞ吾身のみかに主君の辱おりと思ひけんこれ承らんといふもののもおし猴に遥に人を直下し尻をこおさへむけて打たゝき或に瞻れるさまおどしてその形勢いと拙おりしかゞ忠國齒を切りて大に怒り安からぬ事かおゝが家累代武門に列りこれ又不肖なりといへども人の爲に殘られをしあるこの畜生我を恥る事かくのごとしもし立地に打殺して臨とおほにあらをいふたゝび館へ歸れゞとていれまき罵るといへども頻に施をべれ謀もおく只管憤に堪をして

打手紀八をちかく招き汝箭様〳〵に書つけて寺門の柱に貼おくべしと仰せれば紀八にふとお袖紙状推ひられつかゝゞかき筆を拔出して墨斗の墨を器文殊院塔上の猴を射落したらんものに最愛の女兒白縫をもて妻あにをべし久壽元年三月日阿曽三郎忠國と書とゞめゞがて門にぞ貼せける里人等にあれを見て彼にかたそこきに傳へ西より東より走り来つみお門内に集會されどこれらに只罵り騷ぐのみにて物の用にたつべきものにもあらをこの折しも八郎爲朝に當國に到着ありて阿蘇社宮へ詣ん爲彼鶴を從者に扛擔せ文殊院のほとりを過りなふに人夥馳あつまり門の柱にに。しかく〳〵の趣を書て貼おれたれば是に夢の告に妍き妻を娶る事あらんと聞えしに。お社事おるべしと曉得なひつゞがて門内にをゝみ入て忠國に對ひそれがし彼猴を射おとして進らをべしと宣ひけり忠國おれを聞てまづその人を見るに年紀は十六七にして筋骨逞しく面白く鼻高く眉に緑にしく青山のごく脣は紅にして春花のごく耳厚瞳二ツありて身の丈七尺あまりおるべく平人おらを見えしかば。心にふかく驚嘆し御身よく彼猴を射てなにらば。とが壻にせん事子細あらトといふ。さらば弓勢の程をもおらせまゐらすべしとて爲朝に從者に持せたり志弓矢をとりて岳のほとりに歩を寄りなふを

見るに弓に鐵の榜を押たゝめつるやうおもへば忠國にきらん人みな大に驚死てかゝる強弓を引んものゝいましへにも絶えて聞ぬまして後の世にはおもわありがたゐるべしと稱ていと頼もしくおぼえける猴は遥に爲朝を見て脫れがたき死をありたりけん法然としてうち歎くがごし。洁處に當寺の住持この事を淺間けん職事僧を遣はして忠國まいいせけるは抑こゝ山は仁明天皇の勅願にして弘法大師の開基たり特に彼塔には勅封の佛舍利を納たるにあれに對ひて弓を引んは朝敵佛敵に齊しかるべし且は彼猴罪ありとも一たび寺内に入りしものを無下に殺さんは法師の忍びざる所なり彼といひ是といひ此事宥免に預るべしと述たりける忠國聞て眉を顰彼猴靈場に走り入るといふとも既に人を殺せしからは敢て怨をべきにあらぬもあれど勅封の佛舍利を納たる賢塔に對ひて矢を發さんには後難はかりがたし。こは何とせんと愁悶るまで爲朝も用意忽地相違して舊の處へ退死なへば猴はふたゝび勢力出て指さし恥る事はゞめにも過たれば忠國まを〳〵憤りに堪ず爲朝も心の中ふかく望をうしなひ。これ今猴を射ん事はいと易けれど事かおはねばせんをべなし。もし彼八町礫紀平治だにあるならば弓矢は用ひをして打落は事難きにあらざめれど國を隔たれもそれも

かひなしおどろきまうさまを思ひ屈しぬふに彼鶴茹の中にありて俄頃に羽たゝきしあは〳〵飛出んと欲る氣色あれば爲朝見そなはしてふたゝび曉得。この鶴が夢に告て阿蘇の宮のほとりに放てよといひしはけふの事にて彼みづからおは事あるべし。かゝるまゝ深く疑ふべ死にあらずとて腦太くも重て忠國に對ひそれがし弓矢を用をし。て猴を打落進らをべしと宣へば忠國斜おらを悅びて既に宣ふごとくならば幸おれにまものあらじとく〳〵用意しぬへと回答せり爲朝はこゝろに祈請しつゝ茹の門をひらきぬふに聚てこゝにて放べく思しければ足には舊のごく牌扶着たるが鶴は茹を出るとやがて虛空遥に翔揚りゆくへもしらをおりにけり忠國主從はさらおり是を見るもの冷笑ひこは嗚呼おる愚者もあるかお驚鄙おんどこそ猴をも捉らめ鶴の獸を捉といふ事はたえて聞も及ばぬされば こそそらおらを顏して飛うせたりおどさゞめ死あへり爲朝もこの光景にふたゝび疑念を生じ。そおたの空をうち眺ておはしけるに且くして彼鶴は西のかたより翔來り塔の火珠をはおるゝ事一丈ばかりにして處も去らを翔居たるを猴はうち仰ぎて瞬もせをちかくよらば摑ともをべき氣色おり鶴はおほ高く翔低く翔てやゝその間ちかくおると死何とかしけん猴は大に慌忙き火珠を走



東京絳史出版社

東京絳史出版社

り下りんとするところを鶴ハさとおとし来て鞘もて丁と衝やうおりしが猴ハ忽地血
ヨ塗れおがら捼と墮鶴ハ高く翔あがりて南を投て飛去りけるこれを見るものみな脅
を揚嗚呼と感ずて嗚も已ぞ忠國ハ喜びヨ堪ぞ爲朝とゝもヨ投猴を見るヨ猴ハ背より
胸さかをいたくつらぬかれて死さるが目鼻の間ヨ夥しく砂のかゝりてありしかは。
忠國掌を拍していふやうハゞめ彼鶴がいづ地ともおく飛ゆきしをお社砂を衝来て猴
の眼ゆぶしヨせんが爲おり飛禽といへども事ヨ臨てよく剛敵を拉ぐその智ハはか
りしるべかちぞ嗚呼奇あるかおと嘆賞し更ヨ爲朝ヨ對ひて禮儀を正くし。そも御身
ハいかおる人なれゞ輙くヨが仇を亡しぬひたるもし仙境の客おらぞハ必ぞ名ある武
士おらん今日の事いと不思議ヨひといへゞ爲朝含笑て名告申さんも嗚呼にはあれ
ど久しく父爲義が不興を得て豊後のかたヨ身を寓せし。八郎爲朝といふものゝ彼鶴の
事ヨつきてハ種々の物がたりあれど一朝ヨハ說盡しがたし。これ幸ヨして御身が望
をかおへ。いとよろこゞしくひと宣へゞ忠國且驚き且うれしみていふやうこハ思ひも
かけぬ源家の御曹司ヨて在せしかな器量骨柄平人なちぞと見まゐらせしが果してし
かり。それゆし不才なれども弓矢とる身の數ヨも入れり。もし嫌ひぬハぞハ女兒白縫を

進らせて。おがく晉素の好を締ひべし。いかに諾おいぬハんかといへゞ爲朝もこハ
希ところゝ親兄弟ヨも遠ざかりて頼むかゝなき身ヨしあきゞよ死ヨ計りてぬハりハ
へと宣ふヨぞ阿曽の家隷どもよろこぶ事限りなく。みな万歳とぞ祝きける。かくて忠國
ハ爲朝を伴ひ士卒を將て。ヨが館ヨ立ゐへれゞ住持の聖僧ハ彼猴が死を哀ミいかおる
罪犯あるヨもせよ。ヨが寺ヨ逃れ来しものを遂ヨ救ひ得ざりしがいとをしとて屍を山
門の外ヨ埋させぬひしを好事ものこれが墓碑を作り名づゐて猴塚とよびけるとおん。

第五回

白縫風流女兵を操る
爲朝勇敢九州を伏す

阿曽三郎忠國ハ當日爲朝を伴ひかへりて厚く管待し女兒白縫ヨもおかゝの物がた
りして只顧その智勇を稱讃をされど白縫ハいまだ爲朝の爲人をしらざれゞとみヨも
承引ざりしが彼人ハ父の爲ヨ恥辱を雪たる恩あれゞその契約を破らんも義ヨたがへ
りと思ひかへしとも かくもと回答しかゞ忠國大ヨよろこびて。やがて日を卜吉
席を設て酒食盃盤ヨ至るまで悲美を竭し。その夕爲朝ヨ白縫を妻あハせけり。かくて婚
姻の式も果て後一人の老女燭を秉て前ヨをゝみ爲朝ヨ案内して白縫の臥房ヨ誘ひつ

つ廊のあをたまで来つると知彼老女見かへりて此處おそ姫の臥房に侍るといふ爲朝は何氣おく。やをら障子引あけて入ぬへば忽地白紋赤き衣うち襲て素練の玉襷かけたる女子二人手まへ一枝の櫻花を拿たるが。やと脣かけて打んとをるを爲朝腰おる扇をもて左右を丁とうち落し。すゝみ入らんとしぬへば同じく打扮ある女子十人あまり雄手雌手より群だち来つ三國一の智君をいざ祝ぎまゐらせんと動揚めきて。もてる櫻の枝をおもゝ打んとすれば糸遊の糸にもつるゝどくまて搔潛り押隔或は搔遣うけとむる。扇に風のあれば花霏々として散亂し。蝴蝶に似たる紋兒の閃くも又風情あり是は孫子が女兵と操り彼は太真が花の軍に留奇南の熏と花の香とおぢまぜて披紋又靡く。いづれ花ともに知がたし知を爲朝は自若として。ほとりへも寄せつけぞ拿たる枝を一ッも留めず。うち落〳〵。あは猥藉へと宣へば女使ども驚知まどひ。みな一帯に蹲踞ぬ時に白縑屏風押ひらきて徐やかに出迎へ。やよ御曹司怪みぬひぞ。わらは幼さより此情愚に天が下に比類おし知智勇の壯夫おらざりせば。まみ江と思ひ定めおがら深窓に養れて。いまだ君が武勇をしらず疑ふとまはあらねども。かくは戯れまゐらせし是みな吾身の過あり。ふかくな怪みぬひぞと賠らるゝも又憎からねば爲朝背向に見そおはしく千引の石は轉すとも爲朝を打んもの世にあるべうもおもほへぞ況女子の軍配は。いと淺はかにも見ゆるものかなと笑ひぬふを女使ども立よりて。とりおく臥房に誘ひぬ。かくて夫婦睦しく偕老の契淺からぞ見えしかば忠國も斜ならぞうれしみて。まを〳〵厚く管待せし程に爲朝の威勢やうやく朝日の昇るがごとしをもて隣國の武士みなその下風に立ん事を恥がひて。好を通ぜるもあり又その智勇を猜て胡越のおもひをおもものもありけり。おゝに權守季遠は爲朝既に阿曽忠國が壻となりて。隣國の武士みな好を通ぜると聞て大に驚知直に使をもて太刀馬などを贈る。嚮に管待の厚からざりしを陪話たりける。この時八町礫紀平治は野風(猥の名)を牽妻の八代を將て豊後よりまゐて。九州を一統をべーとて既に合戰の用意をなーぬゝ折しも菊池原田が徒黨の軍兵を領て寄せ来ると聞えし程に先ぞるときは人を征をその儀ならば逆寄して攻破れと仰もあへぞ俄頃に些の軍兵を驅催し阿曽忠國を案内者として彼城に推寄せ只一戰に切從ぬへり。これを軍の手はゞめとして城を落しぬゝ事十餘箇所凡二十餘度に合戰に一度も後をとりぬはぞ爲朝の強弓武略はさらに士卒いづれも勇知が中にも紀平治が礫

手取與次が組打亦是萬夫不當こ加藤敵陣を夜討しぬゝ時は彼野風と呼べる猿ま
ゞ陣中に潜入り夜巡りの兵士を焚殺して主を引入れまゐらせしとぞされば爲朝は只
一歳が中に九箇國を平呑して筑前國太宰府に居城を搆みづから摠追補使となりて賞
罰を掌り稅敛を薄して寛仁政を施したまゐしかば國民稱讃して鎮西八郎どのとぞ
申ける不題少納言入道信西は爲朝をいたく憎み彼人豊後へ下りて後も人を遣はてを
りをりその形勢を探り聞せまゐがあのごろ香椎宮の神人が内通して備細に聞濟まゐ折も
がなとおもひ居たるに久壽二年の春一院(鳥羽上皇)鳥羽の成菩提院の御所に池を堀
らせぬひし程に是究竟の事よとよろこび潜に上皇に聞江奉りけるは誠やらん爲義が
八男おる爲朝筑紫にありて奇しき鶴を獲たりと申ものゝいひ。その鶴はむかし義家が放
せしものにて今なほ黄金牌を着ていが形は鶴よりも大きくて鳴聲高く聞ゆとおんは
やく爲義に仰て彼鶴を召のぼし池の汀に放ぬゝやいと愛たかるべしと禁けまゐ。上
皇諾なはせぬひて次の日爲義を召て鶴を進らせべ旨よしを仰下されける爲義朝臣は
院宣の趣をうけぬゝりくふかく怪しみ彼爲朝は故ありて西國へ逐下し年来通路を絶
ていへば。かゝることとあるとも聞まらでいに何人が聞てよくまらせぬふやらん。まづ試

にいひ遣しいべしと申て出ぬひけるが當日俄頃に物馴たる家隷秦次郎景延といふも
のを太宰府へ起程せとく彼鶴を進せいへと仰遣されし程に秦二郎はとるものも取あ
へず汗馬に鞭を鳴らし晝夜のこかちもおく路を馳て日おらず宰府に到着し景延大殿
の仰事ありてまゐれりと申せしかば爲朝やがて對面ありいかにや景延何ぞ所用にて
下りつる父には恙おく在ます歟勘氣を許ぬむんとの御使にはあらぬあと宣へば景延答
て大殿をはゞめまゐらせ御兄弟みな壯健にはしましはへば御こゝろ易くおぼし召
さるべし且それがし頓の御使をうけぬゝりてまゐりしはかゝる事ゝとて一院(鳥羽
上皇)より鶴を求させぬふ首尾をあちもおく述にけまば爲朝うち驚て。その鶴は去
年の暮春如此〳〵の事にて放遣り今は遥に程も經たり。ゝしその頃にかゝる仰をうけ
ぬゝらば推辭奉るべ旨にあらねど既に放てあまたの月日を過せしからは。いかにとも
せんとべなし。こは何と申てよかるべきと宣ふに秦次郎も沈吟しふかく望を失ひけり
しばしありて爲朝又宣ふやう。これ緣故を猶しらり。これは信西が謀にて。これを憎のあ
まり鶴を放たる事を聞しりて知らぬ顔し近日獲たるやうに奏し奉りしとおぼし。しか
らば鶴は放せしと陳ぜともよも實事ともしぬはゞさまべとて他し鶴を進らせなば君

と父とを救くゝ只命運を天に任せ。ありのまゝに告申さめと宣ひて泰次郎に八町曝紀平治を指副へがて洛へのおしねへり。さる程に景延紀平治は只管路を急ぎ未だ幾日もあらぬに締りはほり直に爲義朝臣に見江まゐらせ景延まづ爲朝の書呈を獻れば紀平治は爲朝の書もらしなへる所を審に演說せり爲義朝臣は緣由を聞て大に愁ひなひ。爲朝い物を惜みて父の禍を顧さるゝのおらねば。よも偽にはあるべからぎしかれども讒者路に横れば。いかゝある御咎を蒙らんも量がたしされば。只爲朝が申旨を申て見ばやとてやがて院の御所に參り爲朝が鶴を獲たりしは去年の春の事にてそのおろ放遣りてひへば。いかにともせんをべく迷惑只この事にていと聞え奉るに上皇御氣色あしく見えて爲朝い近曽宰府にありて武威を逞をと聞り。鶴を放せしと申い偽にて惜てまゐらせぬおるべしその罪あれ違勅にひとしもし速に召進せぎい父爲義を解官せしめ前撫非違使におさるべしと仰ければ爲義恐懼て六條おる館に退れ居多の子息を呼びあつめてこの事いかにしてよからんと議しなふに嫡男左馬頭義朝このころい下野守にておはせしがをゝこ出て宣ふやう普天の下王土にあらざるなおし今院宣によりて彼鶴を索んにやは獲ぎといふ事いあるまじくいされどその往方をいづくとも定めぎい索るに路おからん歟播磨守阿階易就い卜筮に妙おる人へまづこの人に問て有無をしらせないんかと宣へば爲義げにと點頭たまひて俄頃に易就を招れ放せし鶴の往方を問なふ易就おばし考てこの鶴遠く去りて今い日本の地に留らぎもし琉琉國に渡りて索なはゞ百日を出ぎして輙く得なふべしといふ爲義朝臣いこの事を聞て又一層の憂苦を増しこの國の中だにも天飛ぶ鳥を索んもいと難もあるものを琉球までおもむかん事容易業にあらぎされど彼國へぎに到おば百日が間にいかおらぎ捕得んといふ事のまづうれしく易就にい厚く酬て次の日彼人の勘文をもて緣由を聞え奉り百日を限りて鶴を尋出ぎべ況よしをねがひなひしかば上皇ぎうやく聽させなひて。おのらば日數たがひおく鳥を進せひへと仰下されけりさて爲義朝臣いぎこゝ安堵て御所を退出ふたゝび景延と紀平治に仔細をいひよくめ直に宰府に下りなへば彼二人いそに日に中に都を出て二百里にあまれる路を七日ばかりに走りつ況易就の卜筮爲義に言語一五一十を申ゝり爲朝聞て迷惑面にあらにれしが忽地に宣ふやうおもにて思ひあたれる事あり彼鶴が去年の春南海の果にて會んと夢に告しいおの事おらんまづ報人に思ふ所をも聞て事を定むべしとて舅忠國をむかへ夢に

家隷を集會首尾審ゴ說をいりて宣ふやう。琉球ハ薩摩潟を去ること大洋三百七十里を隔たるゴいかゴして渡ゆかん殊ゴ地理をおちぎ言語を解せぎよしや彼鶴そ社國ゴありともおれを百日が間に索得ん事いとおやつかおしおの〳〵謀あらバ聞まゐしと宣ひけり。時ゴ八町礫紀平治班をを、み出それがしが祖父ハ元琉球國の人おるをもて彼國の事をば父もをさ〳〵おりて生平ゴかたり聞せひひきまづその槩略を申ひべし。琉球いゴしへ流虬ゴ作る地界萬濤蜿蜒とーて虬の水中ゴ浮むがごーよてこれゴ名づく。或ハいふ開國社主虬を伐て兩顆の珠を得たり。故ゴ流虬又琉球と名づくるの異說おり。その人物眼深く鼻長く頗婦人ゴ類せり男子ハ疑鬚を剃女子ハ墨をもて首ゴ黥をその都を那覇と喚び王城を奉神殿と号ぢ漏刻門瑞泉池中山牌坊等の諸關門ありて乾の山を八頭山といへり又東ゴ天界等寺西ゴ圓覺等寺あり迎恩亭ハ花瓶嶼の北にあり。こゝを去事五里ゴーて天使館あり又去事三十里ゴして歌會門あり又南ゴ一ッの島あり其山を太平山と喚ぶ南北ゴ又一ッの島あり。おれを小琉球といふ南の海中ゴ又四ッの山あり所謂琉黄山熱壁山彩山與灰堆山是ゑ又西北ゴ三の嶼あり所謂龜鼈嶼高英嶼彭胡島これなり又西ゴ三ッの嶼あり所謂馬齒山古米山彭家山是あり又二ッの山あり釣魚嶼瓶架山おれゑ。その國王を中山と号し春宮を中城と稱し后を中婦君と稱し王子をゴんーと稱し武士を親雲上と稱し。その次おるもおを筑登と稱を又官名ゴ按司親方等の數品あり。をべて美童を里子と稱を庶人の子ゴ太郎金次郎金おどいふ乳名あり。その言語日本ゴ似て更ゴ異おり日をおでたといふ月をおつきかなーといふ佛をほとけかあー神をかめかなー水をおへい火をれまつ酒をおさけ飯をめし男をおけが女をおいおだ父をせうまい母をあんまあ兄ををいざ弟をおつとう刀劒をほうてう衣服をいぶくといふ。その餘ハ叙舉ゴ違あらむ。おおを國東北ハこれ日本西南ハ福建の梅花所ゴーて大洋七日ゴーて到るべーといふ往昔神功皇后三韓征伐のとき流虬怕れて夥の貢を獻る。おかりーより以降彼洲人我白石琉黄島ゴ来り白石琉黄島人も又をり〳〵彼國ゴ到りて交易せり今ハその事絶たりといへどもおほ十二の島人ハをり〳〵渡海ほるもありとぞ。君もし琉球へ到らんとおらバ。それがし御紫内いたをべーといふ。その辯舌爽ゴして事審ゴ述しかば爲朝ふかくよ語こびなひて。われ汝が事を忘たり。かゝれハ彼國へ到らんも又易ーおかハあれど大勢を將てゆかバ彼國民疑て拒ともあるべければ。ゴまと紀平治と只二人沖の小島の商人ゴ扞扮彼處より便船して彼鶴を索べし但

し貨を多くもてゆかせた事整ゝと宣ひて卷絹練高瀬の木綿おどを擔つくらせまた往ゝ得たまひし珠をゞみづから懷ゝして用意全く備りけれゞまづ景延をゞ洛へかへしゝて社夕主從二人舩ゝうち乘て直ゝ沖の小島ゝ趣紀彼處より琉球へ到らんとて序行ゐへゞ阿曾忠國以下夥の家隷どもゐおのびやかゝ見送りける。

鎮西八郎爲朝外傳 椿說弓張月前編卷之三

東都 曲亭主人編次

第六回 紀平治計を献て地理を覩 寧王女等を饋て寃苦を告

爲朝ゐ路をがら彼國の言語をよく紀平治ゝ問諦らめ薩摩潟沖の小島より便船して順風ゝ真帆揚させ日あらぢ琉球へ渡海しゐひけりさる程ゝ主從ゐ日本の商旅ゝ打まゞりて旅館ゝ歇ひ彼鶴の往方を聞定んとおゐふゝ去るもの絶ておしかくてゐ徒ゝ日數程ふりて邂逅来つるかひもあらゞと只管愁ひ悶ゐへり然るゝ有一朝爲朝主從起出て見ゐふゝもて来りし巻絹練のたぐひ悉失たりしかゞ大ゝ驚きこゝ盜賊の所爲おらんゝいづちより入けんと疑ひまどひつゝ彼此を見かへりゐふゝこゝより入たりとおぼし死處もおしあまりゝ不審けれゞ店官人を呼て。おかゝのよしを告ゐへゐ店官がいふやうこゝよりゐ西南ゝあたりて舊虬山といふ穿谷あり是則花瘋嶼と雜籠嶼との中央ゝして山中ゝ曚雲國師といふ一人の道士在もおり。この神仙よく人の爲ゝ禍福吉凶を說ゐふゝ響社物ゝ應ぜるがどし。おゝをもて國王これを尊敬おゐふ事斜な

東京稗史出版社

らぞ彼朦雲國師。もし欲とおぼせも社あるときは忽地術をもてこれを取りぬふ事あり。そは社とられたるもの齋戒沐浴して山に登り叩首して乞求ると社は偶かへし得させぬふ事もあり。もし又返しぬいぞといふとも國王の尊信しぬふ道士に在せむ。これを訴る事かおひがたく。夥の損をして已のみおかれども聊も悵るこゝろあれば。その人かならぞ祟あり。おもふに御身が物を失ひたるもこの朦雲國師が戯にかくしぬふならん。とり從さんとれもいぞはやく舊虬山へ赴ぬへといふ爲朝聞ぬひて。こゝろに五分の憤あれども色にえ見しぬはぞ。おからば彼山へ行て乞求おん。おゝよりいいかばかりの路程ぞと問ぬふに。一日が中にい輙く到るべしとて。おほ審に說示せしかば爲朝は紀平治を將て。旅館を立出舊虬山へ赴ぬひけり。(爲朝琉球にありて彼國の人と問答しぬふ。は。琉球の言語を用ひぬふおるべし。おかれども讀に已ぢらいしければ悉本邦の言語をもて是を記せり。)爲朝主從い足に信せて急ぬひし程に既に彼處に到りて。山の半腹まで登りぬふに。おの山西南い海につゞ紀峯尖く溪深く松柏森然として晝さへいと暗きに。忽地朦朧として霧起り。只野于玉の烏夜のごく一歩の先も見えにかぞ。こは彼朦雲國師が術をもて。この霧を起しに。が徒を遮り留にぞとおぼすに只管憤りに堪ぞ主從脇を彌

導とし巖に傳ひ松杉に探よりなほからうゞて登らんとしぬふに爲朝岸破と踏外し數百丈の谷底へ真逆さまに落ぬひしを紀平治いをおし前にたちて歩みしかば。この事をあらぞ爲朝い器械とりていい早業の手煥煉にて。よく七尺の屏風を飛躍ぬへども今おゝろ忙しき紀まゝに。かゝる悞おぬひければ落ると紀株にて腦を打おはし昏倒て在しける。忽地女子の聲して。こいに。が珠に似たりおいねよく。が珠に似さりといふが。不圖耳に入りしかば。身を起して見かへりぬふに年紀三十七八なる婦人と。十四五歳なる女童と。が懷にしたる珠を取りて。いとうれしめる氣色なれば。忙しく走りよりて。そいに。が秘藏せる珠ありかと返しぬへと宣ふを。女童い返さゞとして走り退ぬ。婦人いこれ伏見てうち笑ひ川、爲朝に對ひ。やよ日本人よ願くいおの珠をこの子に與へぬへ。斯ゆいやおほ怪しとも思れん。まづ緣故を聞せ侍るべし。何か匿んこの少女い。この國の主尚寧王の中城(春宮の事なり)寧王女にておいとまを。わらいは則この王女を産まゐらせし廉夫人といふものおるか中婦君(后の事)その姊ふかくして。おば〳〵讒言〳〵剩日雲國師といふ道士を相語て。この王女に位を傳へぬいや久後かならず國亂をおんといいせし程に。王も御こゝろ疑て決しぬいぞ。おかるに往古太平山の前の海に一ツの虬ありて常に風

雨を起し洪波を致し五穀を損ひ洲民を害する事多かりければ。先王ふかく怒ひて天地に祈禱。しみづから潮に浸りて彼虬を殺し。是を疵架山の東麓に埋ぬふ今の舊虬山是なり。こゝに先王虬を殺しぬふとき其腦を裂て二顆の珠を得ぬひしが。その珠一顆を琉球といひ又一顆を球といふ。されば此の國を流球と名づけしは。虬を切流しぬふに起り又琉球と事事は。彼二顆の珠を表ぼ。この珠代々の王に傳へて。中華備國の玉璽にひとし。元來おの國の風俗にて王子おはしまさゞれば。寧王女に位を傳ぬよ。おれば寧王女前年中城に。たちぬふ時尚寧王まづ彼珠を領ぬひしよりいく程もなく彼珠一顆ぞ失ありけるかゝる神寶の故なくて失おんもいと怪し。是疑ふべうもなき中婦君の妬にて。彼曚雲國師に盜せぬへりとは猜しながら。證据おければ。いひとぐに道なく畏けれど王も又御おゝ。浅えかに在にともて。終にこれを曉得ぬはを。怒地中城を廢して庶人とおし。こちはとも。この處に棄らるたれば。ありし昔にかはりゆく朝の山のあら雲も住はてがゐ。都を隔泣とかあしみ空蟬のこが身の秋をかこちつゝ。こゝにある事三歳におよび。事訪ものもまつ風の外にあらしや木がらしの果は。嚶うつ涙の音に寐覺わびし。こが宿の掃もはらはぬ庭面へ。物の落る響せしに驚き走り出て見侍れば。この國の人ともおぼえぬが。

昏絶てありつるは。おは交易の爲に渡海せし日本人よと思ふあら貯もてる藥おんどの。ありもやもとると立よりて御身が懷をかい探るに思ひもかけぬおの珠あり。今熟視侍るに往に王女の失ひぬへる一顆の珠に露たがはぬぞよ。其珠にあらぞともかくまで似つきぬこれを持て都に上り王女を宮中へ還し入れまゐらせ。こらはも又年來の寃屈を脫るべし。御身にありては一顆の珠あり。これに于ては千乘の位に換る重ぞやかく審に聞え侍きぬ。まげてこらはに得させてよ。とかき口説つゝ乞求め。更に返さぬべき氣色おければ爲朝數回嘆息し。まぢこの二人の女子を見ぬよに形容こそいと宴たれ物いひざまも風流たるに彼少女の氣高くて平人おらぞおぼせしかば。今この珠を與へて望を辭得させぬやとて。おばし沈吟おぬひしかば。又思ひかへして宣ふやう。彼珠は。わが本國にて得たるものにて求ぬに玉璽とやらんにてはおし猜しぬよどくまれは日本の商人ん。この國に索るものありて夥の貨を積て渡海せしに前夜曚雲とかいふ惡道士に奪ひ去られ。それをとり戻さんとて彼首の山へ登りしに如此々々の事にて。この處へ轉墮かく分抱を得てひへば。その珠も又惜むに足らねど。こが貨にみお失ひて。その珠只一顆をを。これさへ御身に進らせおば何をもてこが索るものと換ひべき。とく〳〵返しぬへら

しと宣へば廉夫人聞て寧王女もし都に在さば何にまれ御身が求るものをとらせぬいんもいと易けれど今は一椀の土おりとも心のまゝに投うちがゝく一椀の飯おりとも私には施しぬゝとかあいもさいへ珠だに得たらんには國王に奏し聞え御身が望を稱べし。まづ試に索ものをたらせせんへかしといふ爲朝點頭て。こが索るものはこの國の産物にあらず。これ日本にあるる日一隻の鶴を放せしが足には黄金の牌を著たり。これを放て後こが天皇彼鶴を召進らすべしと勅ありそはさきつ頃放遣ていと陳せども。こは偽おらんとて許ぬはもこれを陰陽師に問ば鶴は今琉球國にありといふ。よりて數百里波濤を渡ぎ。やうやく渡り來つれども。いまゞ鶴を尋得ず却て貨を失へる滯命を御身のうへに思ひくらべぬへかしと宣ふに廉夫人も寧王女もこれを聞てふかくよろおび。こは奇しき事もあるかな今朝しもこが庭へ一隻の鶴のれりたりしがよく人に馴て追へども飛去らず。これを見るに黄金の牌を著たり。その容全く他國より來れるものとおぼしやがて茹に養て今見に彼首にあり。御身が尋る鶴にはあらんといひつゝ忙しく裡面に走り入り玉女とゝもに手も挑げに扛もて出たるを見るに是まがふべうもあらぬ彼鶴にてありおかば爲朝ふかくよろこびおぼして。これおり〳〵に

れ心ありて來たれども終に索得ず今心おくして鶴を見るこそうれしけれ今彼殊をもて鶴に換んにはよも固辭ぬふまじ。珠は既に御身が手にあり。さらば鶴とぬはらんといひもあへず。つと立よりて茹おがらこれを脊負立かへらんとしぬふを廉夫人引とゞめて。今こが王女おもはぬ珠を得て。都へかへりのぼりぬふとみお是御身が賜おれば。このまゝ歸さんも本意おし。おほ且く逗留して王女の發跡ぬふをまち。その酬謝をも受んやといへば爲朝頭を左右にうちふり。これ今鶴を得て歸心矢の如し明日國を異にをといへども今日歡を齊くする事自他の大幸おり。報恩を受るに及ばずといひをはり東を望て立出ぬふ。かくて爲朝は路十町あまりも來たらんとおぼせしころ後方より只管呼ぶものありけり。誰ぞと見かへりぬふに彼王女おり。その時寧王女はやゝちかく走りより。御身この國社祭内をばよくもしらずと見ゆるに是より東南二三十里はみお海濱にして人家おし。もし路に餓なばいかにせん。是をもてゆきたまへと仰て飯とおぼしくて桐の葉に裹たるをとり出て與ぬひしかば爲朝はその好意をよろこび聞ゐ。これを受て懷にをぬへば王女又宣うやうにらいつら〳〵御身を相るに商人の容にあらず實は勇き親雲上（武士の事ゝ）おどにてあるべし。もし時にあはゞしてかく變しくあるぞおら

べ。王が國に留りなへかしと宣へべ爲朝潛にその俊才を驚嘆し給れい全さるものにあらぢ。日本にいおほ父もあり縱この國に留りて富貴を受るとも父母の國にありて貧さにいおかぢひと回答なへべ王女かさねておからべ吾身をも日本へ將て歸りないんや。吾身今珠を得て都へのぼれるい福に似て却て禍を招くに似たり。故いかにとおれば中婦君妬ふかく在おて。これを憎なふ事甚しそれさへあるに。が父王曉雲國師に迷されて國の費を顧なにぢ加之彼珠を。が失ひつる珠とも定めがたきにもしその珠おらざるときい父を欺て身の罪を贖あり又おれをうけ引ざる時い母の志に悖るあり。こゝをもておの國に住果ん事をねがいぢ華人の世言にも小人罪おし玉を抱て罪ありといへる事是ゑがうへにこそと宣へべ爲朝まを〳〵感激し宣ふところ理にいあれど。中婦君おそ憎しともれがさめ大王いいかで父子の恩愛在さぐらんとにかく御おゝろを決して。いやく都へかへりなへおどさま〳〵いひおしらへなふ所しも彼顧夫人尋來て。おい王女こゝに在せし歟婦京の首途も翌あさての頃ならんにおどて漫行し給ふぞ。とく歸ゑなへとて。ゑりなく誘引まゐらぼる間に爲朝はそと其處を走り去り。いよいよ路をいそぎなふに王女の教なひしどく。ゆけども〳〵家もおく只茫々たる平沙なり。日もやゝ向暮として夕飛ほしうなりなへべ。ひらめおる石に尻をかけて向に貫得たりし裹飯を打ひらきなふに飯にいあらで。日本にいまだ見もせぬ蒸たる芋おり。これを食なへべ。その色黃にして味いと甘し。二ッ三ッにして既に腹に滿ぬ後世この芋薩州に渡り世に琉球芋と稱をるいこれおるべし。按ぞるに琉球芋(關東の俗い薩摩芋と稱を當初薩州に種を得たれべゝ)東埔塞瓜(小おるを唐茄子といふ)の二種。近來本邦に多く種て下賤のもの第一の菜蔬とぼ婦人尤これを嗜む又荒年にい粮に當べし。おれを食ふに森なし。但琉球芋にい墨を忌東埔塞瓜に胡椒を忌といふ世人琉球芋に墨を忌事をおりて。いまだ東埔塞瓜に胡椒を忌事をいいぢよりて談今こゝに及ぶものい亦是作者社老婆心のみ。

第七回

紀平治船を逐ふて鐵丸を飛を　野加世馬を駭して捍捧を嚼む

鎮西八郎爲朝は寧王女母子をとりなく見をて、東を浦づたひに只管走りなひつゝ。その日を既に暮ぬれど心いそがいしおれべ通夜路をいせて今い二三十里も來つらんとれぼしに紀こ該鷄明曉を告ゝ鄉もやゝ近づきぬ。おほゆきとゆく程に不意もいでめ船を

着たり。湊に出ぬひけ。この時天は明はあれ一腹の船追風よ強しきとて。纜を解ありけり。これおん嚮に便船あつる日本船おりしかば。心にふかくよろこびおがして。やがてその船に乘うつらんとおぬひしが。さるにても紀平治はいかにおもひらん彼を棄て行んも義にたがへりされば。とてこの船に後れおくれば速にはかへりがたし。とやせまじかくやせまじと。おもはし躊躇て在せしがいな〳〵。憖に紀平治をまちて。おの船に後れ。限りある日數を過さば父の存亡も量がたし。紀平治はこの國に馴たるものゝ。縱棄れくとも歸り來ざる事あるべからぬと思ひかへし。直に船に乘りぬへは。忽地帆を張舵をとり。東北を望て走らせける。不題八町礫紀平治は。舊乳山にて主君を見うしなひ。驚きまどひて。彼此を索ぬるらせつれど。たゞ〳〵逢奉らぬ。おなしく旅館に立かへりて。夜と、もに待ども〳〵。終に歸りぬはざりし程に。心まを〳〵安からぬ。おかるにが主從の便船おたりし船はこの曉に纜を解とてみな旅館を退出にあれば。ます〳〵心もとおくて。やゝやく夜も向明とそるころ。湊のかゝに立出つゝ。只見れば今出る船の中に御曹司も在せしかば。吐嗟と走りよらまくそるに。船は既に磯をはなれ十反ばかり乘出せり。爲朝も又遥に紀平治を見そおはして。彼をわが伴の男ぞかしこの船おばし。艫戻してよと宣へば。紀平治も磯方にたちて。その船かへせと喚かくれど風強まに〳〵走り帆をいかで輙く歸をべき。船人はおらぬ顔して。いよ〳〵遠くおりまさるに爲朝もせんをべおくて。心くるしく見えぬよ。紀平治は躊躇して。とれたま〳〵異國の鄕導に擇れおがら。ひとりかへしまゐらせて。何の面目ありてふたたび日本へ赴くべたいで。追つかんとひとりごち。衣服を脫て頭に捧漫々たる大洋へ身を跳らせて飛入りけり。元來その身西海に人となりて。よく水戲を得たりしかば。瀨に寄る龜に異おらぬ浮きつ沈みつ泅ぐ程に。やゝ彼船にちかくなれど。高浪逆波に隔られ。潮はやければ左右をく泅つくべうもあらぬ爲朝はこの光景を見そおはして。あれ助よと焦燥ぬへども。鎭西八郎といふ事は船人にもおらせぬ。ふかく名を匿して渡海しぬひたれば。われうけぬはらんといふものおし加。海大洋を走る船は。船人といへどもその進退を心にまかせぬ。こは紀平治を見つゝ殺をかと悶ぬふ折しも紀平治は聚てかゝる時の爲にとて。身を放きもて來りし鐵丸に數十丈の緒を著たるを。泅おがら。犢鼻褌の間より拔出し。左手にて浪を切り。右手を高くさし揚て彼鐵丸を投つくるに緒の端は手首にとやまり。鐵丸は遇ぬ船の中に暇と入るを爲朝丁と受とめ。しづかに手繰よせぬるに紀平治は勞せぬして。やがて船に跳乘れば爲朝はとめて

こゝろ安堵て且感ト且悅び今こそ八町礫の綽号虛しからざるをしりつれと嘆賞あり て彼鶴を得たりし事又俄頃ゝ船の出るをもて已とを得ぎかくゐせしおど密ゝ聞えぬ ふゝど紀平治も鶴を見て限りなくよろおび舊乱山より後の事どもを物かたりける。さ れば船中の人々ゐおへて紀平治が形勢ゝ舌を捽ひ凡北國の人ゐよく馬ゝ乘西海の人 ゐかく水ゝ馴るゝといいへど。かくまで水馴ゝ妙なる人ゐいまだ聞も及ばぎとて。みな あしからぎ管待ぬしかるゝいく程もおぐ琉球國禍亂ゝよりて諸國の交易を止めしか ば。このゝちゐ日本人も渡海をるものおかりしとかや。(敍國の興敗ゐ審ゝ後篇ゝ出)間 話休題宰府ゝゐ爲朝南渡のゝち。たえて音耗おければ忠國白縫ゐさらゝ夥の家隷ども。 心さらゝ安からぎ或ゐ海神ゝ祈請し或ゐ土地ゝ幣帛獻り只願遠ゝのへり來まさん事 を願の外他事おし洛ゝても爲義朝臣しば〳〵早馬をもて歸國の有無を問せゐふ使者 の往來絶の齒を挽がどく。けうとくらし豎とまちて僅見れば出ゐひしより既ゝ三箇月 ゝ及び。百日の限も十といひて五日ゝゐ過ぎ。もし徒ゝ日數たちゆかば勞して功おしと 思ふゝひとしほ心くるしけれど大洋數百里を隔たる他の國ゝ音耗を頓致をぺ知やう もあらぎ。浩處ゝ濱瓊の望子連忙しく走り來て御曹司の御船恙なく着岸しゐへりと報 知するゝぞ衆皆凋める草木の甘雨ゝあへるがどく怒地ゝ勇みたち士卒ゐ迎まゐらせ ん爲に馬を牽輪を扛せて海方ゝ走りゆ知白縫ゐ衣服を更席をらきはらはせて待ゐゝ ゝ且くして爲朝ゐ八町礫紀平治以下夥の士卒を將て彼鶴を扛擔せ馬の足搔をはやめ てかへりゐへば阿曽忠國も衙門の外まで出むかへ恙お知歸國を祝してもろともゝ正 廳ゝ至れば白縫忙しく立出てよ祝おび述ゐふ間ゝ紀平治が妻の八代花麗ゝ打扮て 鍋子土器をもて出たりをべてこの日の歡會その事どもゝ至りてへいふゝさへ言語ゝ あまり書つけんゝゐなおくだ〳〵しかるべし。さて爲朝ゐ衆人ゝ對ひて。これ苟も君父 の幸福ゝ因て風濤孜難をおく異邦ゝ往來して容易鶴を得たる事思へば往ゝ雷死せし。 乳母子須藤重季が賜ぞかし。その故ゐ如此々々ゝとて珠をもて鶴ゝ換し事曚雲國師が 幻術寧王女麗夫人の薄命紀平治が水馴ゝ至るまで。おちもなく物かたりゐへば衆皆駭 然として耳を側たて感激斜おらざりし其が中ゝも八代ゐ夫がこよおを知舉動を聞て。い と娛氣ゝ見えたりける爲朝又宣ふやう院より定め下されし日數も今ゐいくばくもあ らぬゝ父もさおそ待ゝびて心くるしくおやすらめ。ゐれけふ直ゝ上洛の首途して片時 もいやく鶴を進らをべうおもふゝ。おかれども夥の士卒を領てのぼらば路も果敢どら

も却繕便ならざるべし因て從ひゆくべきに遊間主計惡七別當手取與次與三郎大矢新三郎越矢源太松浦次郎打手紀八高間三郎以下廿六七騎を限りとせよ又紀平治は長途の疲勞もあるべければ吉田兵衛高間四郎等といもに殘り留りはへと宣はを紀平治もゝみ出て棄ぞうそれがし豊後より付添奉りたゞ〳〵歸洛あるふなるに殘り留らん事本意にあらぬこが身長途の疲勞あらば君も又長途に疲勞ぬえさらんや畏けれど君の爲に粉骨を竭さんと欲をるの志は離に劣るべうもおぼえはいぬ只まげて召俱しぬはれかしと希へば爲朝うち點頭て汝がいふ處理おりかくまでいふを拒んもよしおしさらばおの〳〵行裝せよと仰をれば。みあうけぬはりぬと回答しつ璟て用意やあたりけん時をうつさぬ韓々と打扮つゝ腐庭に居おらびたり當下爲朝も八代に酌をとらせ。ぬたゝび三盃をかたふけて忠國白縫に辭別し既に馬に乘らんとあるへば彼野風と喚れつる猿庭門より走り來つ主の裳を含て引とゝめまいらせ一程に馬はこれに駭き怕れ。屬強あて已ざりける白縫遥にこを見て忙しく八代に告さゝやき御曹司にあれ申べき事の侍りといはせてみづから樣頻に立出るに只今野風が光景を見侍るに何とおく心にかゝり侍るおりねみはくはけふの啓行を止てあかるべき家棘をのぼし鶏を進らせぬへかしといと真だちて聞ゆれば忠國も又いふやうむかし漢土三國の時吳の諸葛恪が畜ける犬は主の裳を咬てその禍ある事をあらせこが國御堂關白の養せぬひつる白狗は車の御前をふさぎて路に呪咀の土器を埋たるを報まねちせしとぞちかくは山雄が事などに思ひ合せぬふべし今こが女兒のいへる如く此度上洛あらんにはは必おそくして吉少からんかと諫ければ爲朝含笑て泰山の言語故おそれにあらぞ。あかあれど。今院宣を辱し父が年來の勘當を許さまて洛へ上りぬる身の小事にかゝつらひて止べきかは。よしやは洛に赴きて首を白刃の下に喪ふとも生涯不孝の子とおらんには勝れり。いにしへの常言にも怪を見て怪ざれはその怪散ぞといへり。ふかくお心にとゞめぬひそ。やがて歸りまいるべし。それ野風を逐退よと焦燥ぬへば郎等うけたまはり。一人は猿の首に鑣を繫て只管おれを牽退んと一又一人は棒をもてあは〳〵追遣らんと致せども野風はおほ退とて支る棒に噬つきつゝいと高やかに叫ぶ腸を斷はらてあれは人みを肩を頻げにも上洛あらんにはよき事あらゝと思ふも社多かりけり白縫も八代も日來雄々しきにや恥らひけんとりおくも留得ぞおなゝ心をいへばへに。岩間の水を掬かねたる心持にて袖濡さゝといくそたび志は勵せともきぬふは南濱

計遊けきゝ思ひを焦しけふは洛へ旅たつ人のゆくを送更ゝおがつかあれ身はよしあしいともかくも一夜はこゝゝとばかりゝ胸くるしげゝ見江しかは爲朝呵々とうち笑ひ男子一たび家を去りては妻子を忘るゝとぞいふある。稿稿は天ゝ係るものを。いとまさおくも見ゆるものかあといひ懲し問りと馬ゝうち騎つゝ鞭を鳴らして出ぬゝ隅呼悲れかあ是やこの行てかへらぬ主從妹夫の契も玆ゝ絶んとは後ゝぞ思ひ合されける。

第八回

寶莊嚴院ゝ御曹司強弓を示す
白河山中ゝ八町礫別離を悲む

六條判官爲義朝臣は爲朝計放たる鶴を召進もべき爲一院（鳥羽上皇）より定め下されし日數も既ゝけふ豆ゝ迫りぬれどいまだ筑紫より有無の音耗もあらざれば只顧憂悶ぬゝ折しも忽地御曹司ゝづから放鶴を撈て上洛し六條堀川の館ゝ到ぬひしかば斜おらむよろこびおぼしやがて父子の對面を許しぬひて。汝が此度の忠勤は往の過を補ふゝ足れりと宜へば爲朝も恭あれ尊顔を拜して。よろこばしきよしを申て。つら〳〵見奉れば五年が程ゝ思ひしよりは老くたちぬへりさるを久しく遠ざかりまゐらせたる不孝さよと悔うらみて。浸ゝ落淚しぬひける。かくて判官は時をうつさず鶴を扛擔せて。院の御所ゝまいり。即これを進らせしが。近曽近衛院御惱おはしまして日ゝ〳〵おもらせぬゝをもて。一院は鶴を御覽ぜるといへども敢御よろこびの氣色もおくむかし義家が居多の寃魂追福の爲ゝとて放たるものを。朕が畜んもよしおしこれをば放得させよと仰てやがて鶴を放させぬへば鶴はふたゝび冠を出て。九霄ゝ飛揚し爲朝の苦辛忽地徒事とおりゝけり此のち何とも仰出さるゝ事おのりし程ゝ爲朝はちかきゝ筑紫へ下らんとれかせしが有一日徳大寺中納言公能卿を上卿として外記ゝ仰て宣旨を下されける。その文ゝ。

源爲朝久住二宰府一忽二緒朝憲一成二背輪言一梟惡頻聞
振籍尤甚早可レ令二禁進一其身依二宣旨一執達如レ件

かくのごとく仰下されしかば爲義うち驚きゐひて彼が鎮西ゝありて武威を逞しうせしは國司の匿弱酷吏の非義を誠つるまでの事ゝて。朝家ゝ敎き奉りしゝもあらぬ此度の忠勤ゝ恩賞はおくともかゝる仰を蒙こそこゝろを得ねとつぶやきぬひしかど爲朝は驚ざたる氣色もおくゝ計は是信西がおを庇なり。賛て思ひ設つる事よとて。ふかく引籠居

て罪をまちなゝゝ主上の御憍剛く在ませ故ゝや。かさねて何の制度もおく。七月廿三日ゝ至て近衛院敢ゝ崩れなひけり聖算十七歳と聞えし上皇(鳥羽帝)女院(美福門院)の御歎きに更ゝたぐふべ死もあらぜ只新院(崇徳帝)のみぞゝ時を得なひて。ゝが身こと位ゝ供つかをとも一の宮重仁親王(崇徳院第一の皇子)を位ゐ即せなゝらめ。とゝと願もしくおぼしけるゝさにおくて美福門院の御にからひよて後白河院(時に雅仁)この時と四の宮とて打こめられて在せしをやがて位ゝ即まゐらせなふ。あれ全く近衛院世を早うせさせなゝ事に新院の呪咀しなゝおりと思食て法皇(鳥羽帝)ゝもひとかゝ聞え奉をかくにはかりなゝとおんおれゝよりて新院の御恨いよ〳〵ふかく見えなひけるさに源腐即位に今茲もくれてあくれば久壽三年四月廿七日ゝ保元と改元ありけり。是より先太宰府ゝに爲朝久しく六條堀河の館ゝ押籠られて在をると聞えし程ゝ衆人今さらゝうち驚れされにはトめよりよ死事あらゞと思ひつるはといひ罵り周章大らたおらされば白髭もおよおれ物おもひのやるかたおくて紀平治が妻八代を宰府の天神ゝ代參りさせて。今一〻たび夫ゝ過せなへと願たてまつりける紫下其生再覩今茲七月端の二日一院鳥羽法皇崩御おなひぬ。去年の秋近衛院されたゝせなひた

る御歎きのつもれるゝや四月のころより御違例ちりと聞えしが聖壽いまゞ六十ゝも滿なゝねばいと惜かるべき御齡おりさる程ゝ新院に聚て思し召たつ事の在して。こゝ折しも何とおく世の中恩剛おりぬ。これゝよりて内裏より爲義の嫡男下野守義朝ゝ仰せて東三條の留守ゝさふらふ小監物藤原光貞を召捕せて拷問せさせなふゝ新院の御謀反かくれおきよし申けり新院もこの事を聞食てさてゝ匿むとも今はかくれあらゞ。まづ志かるべ死武士を召せとて。夥召ける中ゝも義朝は既ゝ内裏へ召れて參りたゝど彼が父の爲義に召ゝも應ぜをして。おゐ館ゝありと聞ゆ。さらば爲義を召せと仰せて。志ば〳〵仰下されけれども爲義かたく辭申て得參ざらりし程ゝ。かさねて左京太夫教長朝臣を六條堀河の館ゝ遣さゝ。いと叮寧ゝ召させなひしかば爲義朝臣今に己とを得ず四郎左衛門頼賢五郎掃部分頼仲賀茂六郎爲宗七郎爲成鎮西八郎爲朝源九郎爲仲をべて六人の子どもを將て白河殿(新院の御所を申を)へ走參り新院御感斜おらを近江國伊庭莊美濃國青柳莊この二箇所を賜りて即判官代ゝ補し上北面ゝ候をべ死よし能登守季長をもて仰らゝ鵜丸といふ御劒を下されけり。かくて合戰の評議あるゝ。鎮西八郎爲朝ハ獅子の丸を縫たる直垂ゝ八龍といふ鎧ゝ塞し白死唐綾を威せる大荒

目の鎧被て。三尺五寸の太刀を熊皮の尻鞘入れ五石の弓の長七尺五寸ありて。つく打たるを三十六指たる黒羽の矢を屠兜をゞ郎等に持せて大床を歩み出たる形勢勇ゝ奬脅ともまさり智ゝ陳平をも超弓ゝ元来養由基をも恥べからず天晴勇々しき大将やと人みな只額稱讃す新院も母屋の御簾を綻はして厳覧あり彼が五年あまり以前を式成則員が矢をとりける時よりゝ身丈も一岌高く見ゆるぞ疑を一騎當千とゝかゝるものをいゝめとて御感ふかくおゝしましつ。百戰百勝の良策あらゞ申べしと仰下されしかば爲朝うけゐゝり機を臨み變に應じ敵を一時に拉ぐの謀を獻ぜを聖運の傾く所ゐ左府頼長公これを振て用ひゐゝぞ只徒に敵の寄をるを待ける程に十一日の暁に清盛義朝を大将とし數千騎の官軍押寄来て既に手詰の合戰に及べり。さる程に爲朝ゝ鎮西より召俱したる。廿八騎の郎等を前後左右に從て真先に馬をゝめ只一戰に清盛の大軍を追ちらし兄義朝の兜の星を射削て膳を冷させしゞ〳〵勝に乗るといへども。おほ目にあまる大軍おれゞ終に新院方うち屠て官軍處々に亂れ入り忽地に火を放しかゞ。新院ゝ東の門より出御ありて北白河を投て落ゐふ御方の軍兵ゝこれを見奉るといへども猛火に隔られ煙に咽びて供奉する事かおゝぞみな四落八落に落行けるこの時爲朝の廿八騎のみ一歩も退かぞ奮撃突戰して新院を落しまゐらせしが終に大刀折れ勢力究りて高間三郎ゝ金子十郎に討れ手取與二ゝ仙波七郎に組討せられ悪七別當ゝ齋藤實盛に首を授く。おほこの外にも大矢新三郎越矢源太松浦次郎手取與三郎打手紀八をゝゞめとして。みな悉く討死したりしに八町礫紀平治ゝいまだ薄疵一個所も屠ぞ主とゝもに路とゞまりて防ぎ戰ふを爲朝見かへりて。今ゝ君も父も遥に落伸ゐひつらんに。いつまでかくてあるべき。いで御蹟を慕ひまゐらせんとて。心しづかに落ゆきゐふを逐ひとゞめんとする敵あらざれゞ既に行延ゐひしが又馬を馳かへして上矢の鏑只一條のこれるを世の人に見せはやとおぼしけん。實莊嚴院の門柱に標と射とめて過ゐふ。抑爲朝この軍に二十四差たる矢二腰十八差たる矢三腰十六差たる矢三腰を屠ゐひしに。このうち義朝の兜の星を射削たると大場景能が膝節を射切たると二條あらでゝゝ化矢おく或ゝ一條に二騎三騎射つらぬ死或ゝ近づく敵をゞ引よせて首を横切搔摑て投おろしゐひぬれど大度の將に壞れんとする。よく一木の柱べきにあらざれゞ。心の外に敗北し終に落人とおりゐふこそぜひもおき。かくて爲朝ゝ近江を投て落ゐふに。白河の山中にてあゞし馬を駐め紀平治に宣ふやう恨らくゝ頼長公が謀を用ひゐゝ

ぞ居おがら敵をまちされぱこそ忽地軍敗れて君父の往方をゞまらねされぱとて直
に自害をべ死まあらぞ。されば父に尋逢まおらせて世の光景をも見んと思ふ。汝ねこ
ゝより筑紫へ立かへりて忠國白縫等にこの事を告よかしと宣へば。紀平治聞もあへぞ
これ思ひもかけぬ事をうけぬにりひものかお。廿七騎の朋輩にも後れ。これまで付添ま
おらせしに先途を見とゞけ奉らん爲おり。いかに仰をるとも立も去らじといふ爲朝又
宣ふやう汝が誠忠にはよくおりぬ。おかれどもこは軍敗れて爲朝もゆくへなくおれ
ぞと聞えおぱ菊池原田が徒時を得て不意に押寄せ多年の鬱懷をはらさんとせてやあ
るべき。さるを鎮西おる氏族外戚この事をおらぞゝして。おゝろの外に狼狽し忽地擒とお
ぞて生恥を曝らを事おどもあらんには。無下に朽をしかるべゝとかく汝は彼所に走か
へりて忠國に力を戮せ。脫るべくは逃れ。もゝかおはぞはもろとえに討死せよ爲朝が生
前の心かゝりはこれのみなりと言を竭して諭しゆへは紀平治やうやく承引て。おから
は仰に從ひ奉り宰府に走下りて。めざましき合戰しもしかおはぞは忠國白縫は御俱し
て便宜の地に忍せまおらせ時をまちて再會を計りひべし君も又よく艱苦を忍びて性
命を保ゆはん事おそねがはゝしけぞと申せしかば爲朝莞爾として。われに于て懈るとお
ゝ汝女々しく別を惜み落人の物具に目をかくる山法師おんどに支られそ。人の怪ぬ間
にとく〳〵と仰それば紀平治今はせんをべおくて舊の路へ立かへり爲朝は馬をはや
めて誠賀のかたへ赴きぬへり。

椿說弓張月前編卷之三畢